バカとテストと召喚獣と・・・、

下之宮 海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと召喚獣と・・・、

【Ｎコード】
Ｎ４２４４Ｘ

【作者名】
下之宮　海

【あらすじ】
自分の名前しか記憶がない青年、天野快（てんのかい）は文月学園に転校することになっていた。床に落ちていた謎の物体を拾った直後に灰色のオーロラが降りてきて・・・。「行くぜ・・・サモン！変身！」人気ライトノベル「バカとテストと召喚獣」と「仮面ライダーディケイド」のクロスオーバー作品です！（時々ガンダムも・・・）

俺と記憶と破壊者と

一人の青年「天野快」（てんのかい）、彼は一切の記憶がない。辛うじて自分の名前を憶えている程度である。気が付けば自分の家と思われるどこにでもありそうな二階建ての家のリビングで倒れていた。自分のことを少しでも思い出そうとしていると。テーブルの上に鞄を見つけた。そのなかには「文月学園生徒手帳」と転入届、そして教科書一式が入っていた。さらにその生徒手帳の間に謎の「2―F」と書かれた紙が四つ折りにされて挟まっていた。どうやらこの鞄は文月学園の指定鞄のようだ。

「どうやら俺は、〈文月学園〉とやらに転校することになっている。」と理解した快はとりあえず、外に出てみようと玄関に向かった。リビングから出るために扉に手をかけたその時、ガタン！！という大きな音が響き渡った。「！？」驚いて振り向くと、床の上に妙に埃をかぶったベルトのようなものが転がっていた。快は吸い寄せられるようにそれを拾おうと手にかけた。すると、天井に突然、灰色のオーロラのようなものが広がり、徐々に快に迫り、そして快を飲み込んだ。

目を開けるとそこには宇宙が広がっていた。しかし、宇宙ではないことがすぐに分かった。快の周りに広がる宇宙には、地球と、その周りに等間隔に点在する、いくつもの地球があったのだ。

「どこだ？ここは？」おもわず口にしたその言葉に、返事が返ってきた。「かつて、大きな戦乱がありました。」振り返ると、そこには２０歳前半のような青年が立っていた。驚く快をよそに彼は話し続ける。「自分たちの世界の破壊を防ぐため、一人の破壊者に立ち向かった大勢の戦士たちは、仲間とともに、その破壊者と戦いました。」気が付けば、眼下に広がる宇宙は荒野に姿を変えていた。飛び交う光線、鳴り止まぬ爆音、立ち上る黒煙。その中心にある存在に、快は驚いた。快の手にあるリビングで拾った物が、光を放っていたのだ。そ

れは、あたたかくもあり、鋭くもあった。「しかし。」青年がつぶやく。赤と黒の龍がその存在に迫る。だが放たれた光線によって、二体の龍は地面に叩き付けられる。「その存在は、あまりにも強すぎた。」空中に現れた線路を走る赤い列車が先頭の車両を粉微塵に破壊され、墜落する。また風景が変わった。そこには顔をそむけたくなるほど大量の人が倒れていた。倒れている人の腰には、ベルトのようなものが巻かれていた。その中央に立つ存在は何のダメージもなさそうだった。「ディケイド。」その言葉に快は何かを感じた。青年は語る。「世界を破壊する存在にして、世界を創造する者。彼はそう呼ばれていました。」「ディケイド・・・。」快はそうつぶやき、ディケイドと呼ばれる存在を見た。そして「！」あることに気が付いた。快の手にあるものとディケイドの腰に巻かれているものが、全く同じであったのだ。「ディケイドライバー」という言葉が頭に直接響いた。すると、突然赤い体をした何者かが、「待て・・・。」と言い立ち上がった。「クウガ」というフレーズが頭に響いた。そして立ち上がった者の名前ということを理解した。いや、思い出したのだ。「ハアァァァ・・・」力を貯めるクウガ、すると周りの砂利、そして倒れている人の体が宙に浮き、クウガの体が赤色から、黒一色になった。ディケイドと黒いクウガが互いに拳に力を籠め、激突する。そこで風景が宇宙に戻った。「言い忘れました。僕は紅渡（くれないわたる）といいます。」青年、紅渡が自己紹介をした。そして「よろしく、天野快。」といった。快には理解できなかった。（なぜ、こいつは俺の名前を・・・）と思っていると、さらに衝撃的なことを言った。「いえ・・・、ディケイド。」「！」快に衝撃が走った。（こいつ、何を言ってるんだ？）「あなたはあの後、空間の亀裂に放り込まれ、行方知れずになりました。捜すのには苦労しましたよ。」渡は苦笑しながら言う。しかし快にはそんなことは耳に入らなかった。（こいつの言っていることが本当なら、あれは俺が・・・。）半ば混乱しながら考える。そして意を決して問う。「なぜ、俺があんなことを・・・？」言うと渡は「創造は破壊からしか生まれませ

ん。あなたが進んだ道には常に破壊と創造があった。」諭すように言う。「ディケイド、あなたにここで歩みを止められるわけにはいきません。あなたにはまだやってもらうことが沢山あります。」突如宇宙が砕けた。驚く快をよそに、渡は続ける。「ディケイド、そろそろあなたを先ほどいた世界に戻します。記憶がないようなら、その世界で集めてください。」渡はそう言うと、快から離れていった。「待ってくれ！俺はまだ聞きたいことが・・・！」しかし、渡は消えてしまった。一気に視界が暗転する。快の意識は深く沈んでいった・・・。

俺と記憶と破壊者と（後書き）

読んでいただいて本当にありがとうございます。自分なりの新設定や新キャラもつけていくので、応援よろしくお願いします！

俺と初日と紙の謎と・・・、

気が付けば、快は電車の中にいた。「夢か・・・。まあ、それならそれでいいんだけどな。」ほっとしたのも束の間、快は抱えている鞄に何やら固い感触があるのを感じた。ガバッ！見てみると鞄の中には教科書、筆箱のほかにリビングで拾ったもの・・・ディケイドライバーが入っていた。（夢じゃなかったぁぁぁぁ！）シャウトしそうになるのを必死にこらえる。傍から見ればそうでもないが、快は今ものすごい勢いで冷や汗が噴出している。なぜ入っていたかはわからないが、持ってきたからにはどうにもできない。（と・・・とりあえず学校でばれねえようにしないと・・・！）転校早々物を没収されるなんて恥は誰もかきたくないものである。とりあえず上に教科書をのせて隠すことにした。（しっかし・・・、これはなんなんだ？）手に持っているのは「２－Ｆ」とかかれた紙である。（誰かに聞くにも、文月学園の関係者なんているのか？）キョロキョロと辺りを見回す。すると、（おっ）同じ鞄を持っている女の子を見つけた。（女の子かぁ・・・。ん？）ふと見ると、その女の子の顔がわずかに赤らんでいる。そして首を横に振っている。その後ろには、中年男性がいた。何やら挙動不審だ。（ははあ、なるほど。）気づくが早いか、快はズンズンと他の乗客を押しのけ、女の子の前まで行くと、その手をつかみ「おはよう！元気？」と声をかけた。女の子が「へっ？え？あっ」と言ってる間に、快はその手を引いて、もと来たところへ戻った。そして隣の両に移った。そこは比較的人が少なく、二人なら余裕を持って座ることができた。「ふう」と一息つき、「大丈夫だった？」と声をかけた。その女の子は、「あっ、はい。助かりました。ありがとうございますっ！」と心底嬉しそうに返事をした。「うんうん。」とうなずいていると、「あの・・・どうしてその・・・ち・・・痴漢されてるってわかったんですか？」と聞いてきた。「ああ、あの君の挙動と、あの変態エロおやじの挙

動を見れば１２０％痴漢だと分かる。」と答えると「へ・・・変態エロ・・・」と顔を赤らめてしまった。そして快は、「あ、そうそう。教えてほしいんだけどさ、これって何？」問題の「２―Ｆ」と書かれた紙を見せた。すると女の子はきょとんとして、こういった「あの・・・、これクラスだと思います。」と言った。「クラス？」聞き返すと、「はい。２年Ｆ組のことだと思います。私と同じクラスですね。」と言った。「へえ、どんなクラスなの？」聞いてみたらこんな答えが返ってきた。「ええっと・・・その・・・要するにですね・・・２年生の中で、一番お勉強が苦手な・・・その・・・おバカさんがたくさんいますっ！」・・・・・・・・・「マジで？」

俺と初日と紙の謎と・・・、（後書き）

快、ついに登校です！学校に向かう電車の中でクラスメイトを痴漢から助けた快。この助けた女の子、話し方でわかると思いますが、誰なのかは次回発表します！

俺とクラスと担任と・・・、

ところ変わって文月学園の最寄駅を少し出たところ。
快は電車の中で助けた女の子と歩いていた。電車を降りてから、お互いが自己紹介をしていないことに気づき、
「あ、忘れてた。俺は天野、天野快だ。」
「天野君ですか。私は姫路瑞希（ひめじみずき）と言います。よろしくお願いしますね。」
ニコッと微笑みながら自己紹介され、快は姫路に好感が持てた。談話しながら歩いていると、姫路が突然こんなことを聞いてきた。
「そう言えば天野君って、転校生なんですよね。前通ってた学校はどんなところでしたか？」
ギクゥ！凍りつく快。無理もない。彼は自分の名前以外記憶がないのだ。どう答えたら良いか一瞬思案し、悩んだ末
「あ・・・ああ・・・まあ、遠いところだよ、遠いところ。」
と曖昧に答え、これ以上追究されないことを祈ったが、
「遠いところですか。国外ですか？」
追究されさらに困った快は、辺りを見回し、必死に考えた。
「え、ええっと・・・そう国外！ロサンゼルス！」
近くの看板に「ロサンゼルス」と書いてあったので丸々利用させてもらった。そして追究される前に、
「あ！俺今から職員室行かなきゃ！じゃまた後でな！」
有無を言わさずその場からダッシュで逃走。
「あ！待ってくださいー！」
というこえが聞こえたが、気にせず、（すまん、姫路・・・！）と心の中で謝っておく。
思い切り走ったので学園にはすぐ着いた。快は職員室の前にいる。
「よし・・・」
扉を開け、目の前にいた眼鏡の若くそれなりに美人な女性教師に声

をかけた。
「すいません。今日からこの学校でお世話になる天野快です。」
すると、
「あ、はい、ではついてきてください。」
と落ち着いた感じで隣の応接室に案内され、来客用のソファに座らされた。
「では、少し待っていてください。」
というとその人は応接室から出て行った。
5分ほどすると、今度は髪を後ろで束ねた老婆が入ってきた。老婆と言っても腰は真っ直ぐでそれほど老いは感じられず、雰囲気から幾つもの年を重ねて見えた。
「あんたが転校生ってやつかい？」
そう問われ、
「はい」
と短く答えた。
老婆は快の向かいに座り書類を取り出し読み始めた。
「天野快・・・１９９４年7月２８日生まれ・・・肉親関係なし・・・。」
「！」
思わぬところで記憶の破片を手に入れることができた快はわずかに反応した。
「学歴・・・ほう、ロサンゼルスの小中一貫校・・・なかなかいいじゃないか。」
出まかせで言ったロサンゼルスが本当になっていた。一通り書類を読んだ後、
「私がここの学園長、藤堂カヲル（とうどうかをる）だよ。」
と自己紹介をされた。
「はい、よろしくお願いします。」
「じゃあ、手短に言うけど、お前が入るクラスは・・・２－Ｆでいいんだね？」

なぜか確認を取られたが、
「はい」
と答えた。すると、
「本当だね？後悔しないね？」
しつこく聞いてくるので、
「はいって言ってるでしょう。」
とこちらも言い切った。
「わかったよ。じゃあもうすぐ朝のＨＲが始まるから、担任の西村先生のところにいきな。」
そう言われ応接室を出ると、そこにはそれなりに身長のある快さえも圧倒されるほどの大男が仁王立ちで立っていた。
「私が担任の西村だ。よろしくな。では行こうか。」
短くそういうと踵を返して廊下を歩いて行った。快はその後ろにつき、２－Ｆの教室に向かった。

俺とクラスと担任と・・・、（後書き）

というわけで、快が電車の中で助けた女の子は姫路さんでした！ほかにも高橋先生やババア長そして鉄人まで登場し、他のメンバーも早く登場させたいです！

そういえば、読んでいただいたらわかると思いますが、書き方を変えました。読みにくいとの指摘をうけ変更しました。

感想お待ちしております。

俺とクラスと友達と・・・、

「マジかよ・・・」
快は２－Ｆクラスの教室の前にいるが、教室はものすごく汚い、というかボロボロだった。
「２－Ｆ」
と書かれた木札は片方の金具が外れて、ぶら下がっているし、教室のドアは引き戸ではなく障子だった。しかも、穴が開いている。そこから覗くと、全員、机と椅子ではなくミカン箱と座布団であった。
最初の快の発言が、この教室の感想である。そこに、
「では、私が呼んだら入ってこい。」
と当然のように、西村先生が入っていた。
「えー、ではＨＲを始める。その前に、転校生を紹介する。」
『ウオォォォォォォ！！』
世界が揺れたかと思うほどの大歓声だった。
「先生！その転校生は女子ですか！？」
１人の男子が聞いていた。声の弾み様から相当期待しているようだった。
「いや、男だ。」
『チクショォォォォォォォォ！！』
またもや大きな叫び声が聞こえた。
「じゃあ、入ってこい。」
と呼ばれた。（入りづらいなあ）と思ったが、意を決して障子を開けた。スーッ、ガタン！
なぜか少し離れた位置にある障子が外れた。
『・・・・・』
沈黙。
「あ、あの・・・今日からお世話になります、天野快と言います。よろしくお願いします。」

（気まずいィィィ！なんでだぁぁぁ！なんで関係ない障子が外れるんだぁぁぁぁ！）

「あー、私は授業に必要な道具を持ってくるから、全員静かに待っているように。天野は開いているスペースを使え。」

どこか決まりが悪そうに西村先生は教室を後にした。

「ハア・・・」

溜息混じりにスペースを探していると、

「ここ、空いてるよ。」

と1人の男子生徒が自分の後ろを示した。

「あ、ありがとう。」

快は、もらったミカン箱と座布団をそこに置き、座った。

「天野君だっけ、僕は吉井明久よろしくね。」

「ああ、よろしく明久。」

ここで下の名前をつかったのは、関係をつくろうとした快の考えである。

「あ、名前で呼んでくれるんだ、じゃあ僕も快って呼ぶけどいいかな？」

「ああ、そうしてくれ。」

2人が仲良くなるのに、そう時間はかからなかった。

「へぇ、快も1人暮らしなんだ。ぼくと同じだね。」

「お前もなのか、奇遇だな。」

「僕の家族はね、みんな海外で、働いてて、その仕送りで生活してるんだ。でも、そのお金でゲームを買ったりしちゃうんだけどね。」

はは、と苦笑しながら、明久は言う。そんな明久が、快は少し羨ましかった。

「そうか・・・家族がいるのか・・・。」

「え、なんか言った？」

「ああ、いや、こっちの話。」

「ふうん、あ、そうだ、快ってこういうの好き？」

ガサガサ、と鞄を漁り、あるものを快の前に置いた。そこには、

《Hなお姉さんがピー！してズギューン！してあ・げ・る》
と書かれた本、要はエロ本があった。
「ブフォッ」
おもわず吹いてしまった快。
「いやあ、やっぱり巨乳はいいよね、最高だよ。」
とか言いながら明久はエロ本の感想を述べている。そこへ、ゆらり、
とドス黒いオーラが来た。
「へ～、アキってこういうのが好きなんだ～・・・」
「へ？どしたの美波、ってそっちを向いた瞬間腕が痛いィィィィ
！！」
明久は一瞬で美波と呼ばれるポニーテールの勝気そうな女の子に腕
十字固めを極められていた。
「あ、君転校生だよね。ウチは島田美波（しまだみなみ）、「ぎゃあああああ」仲良く
しましょ。」
ニコニコと笑顔で言われるが、人に腕を極めているやつに仲良くと
言われても、めちゃくちゃ怖いだけである。
「は、はは・・・よろしく。」
半笑いであいさつする快の横に、
「おい、転校生、あんまりそいつに近づくな。バカがうつるぞ。」
快より大きいが、西村先生よりは小さいオールバックの男子がいた。
「雄二！快に変なこと吹き込まないでよ！」
明久が反論するが、
「何言ってんだ、鉄人の私物売りさばいて、観察処分者になった大
バカが。」
と軽くあしらわれている。
「鉄人？」
快が聞くと、
「ああ、俺たちの担任のことだ。俺たちはやつに幾度となく鉄拳制
裁をうけ、様々な品を没収された。ったく、あいつの勘の鋭さった
らないぜ。・・・あ、俺は坂本、坂本雄二（さかもとゆうじ）だ。」

「よろしく雄二。あと、観察処分者ってなんだ？」
「召喚獣が実体化する、と言えば聞こえはいいが、要は学園一の問題児ってことだ。主に教師に頼まれた雑務をこなす。」
「召喚獣？」
「そうか、知らなかったな。ここの学園長がつくったシステムでな、生徒の勉強意識の向上を目指してつくられた。生徒はこの召喚獣を戦わせて、召喚獣戦争をする。勝てば設備がランクアップするし、負ければランクダウンする。召喚獣の強さは、生徒次第で、戦争する前にテストを実施して点数を取る。その点数が高ければ強いし、低ければ弱い。」
「へえ、じゃあ明久はバカって言われてたから弱いのか。」
「ああ、そうだ。」
「ちょっと！さすがにそれは聞き捨てならないな！」
やっと解放された明久だが、
「アキ～、まだ終わってないんだから！」
と今度は足技をかけられていた。
「・・・中々上物・・・」
「うわぁ！」
快の横で音もなく明久のエロ本を読んでいる明久ぐらいの身長の男子がいた。
彼は無言でページをめくり、誰も話しかけられない雰囲気をつくっていた。次のページを開いたその瞬間、
ブシャアッ！
突然、彼の顔に血飛沫が舞った。そして、バタリ！とうつ伏せに倒れ、ピクピクと動いている。
「おい！大丈夫か！？」
快が抱き起すと、震える腕を上げ、グッ、と親指を上に向け、パタリと降ろした。
「おい、雄二、明久、大変だ！」
慌てふためくか快に、２人は、全く気にせず

「ああ、気にするな、こいつは土田康太（つちだこうた）、いつものことだ。」
「はい、ムッツリーニ、輸血パック。」
「どうも・・・。」
と輸血しながら、ムッツリーニと呼ばれた彼は、快にあいさつした。
「お、おう・・・。」
まだ落ち着かない快に、雄二が、
「こいつはとんでもないスケベでな、しょっちゅう鼻血を出してる。しかもあんまりしゃべんないからな、寡黙なる性職者（ムッツリーニ）だ。」
「ムッツリーニはね、すごいんだよ。保健体育なら、Ａクラスにも負けないんだよ。それ以外は全然だけどね。」
明久がそういうと、ムッツリーニは快に名刺を差し出した。そこには彼のと思える電話番号と、こんな文が添えられていた。
「《いつもあなたの真後ろに・・・ムッツリ商会》・・・なんだこれ？」
「こいつが経営してる商会だ。そこに電話して依頼すると、金を払えばすぐ写真やらをくれる。」
（何者だ・・・こいつは）
そう思っていると、快の右横に、また１人やってきた。
「おぬしも気をつけろ、転校生。わしも幾度となく、写真を撮られておる。」
見ると、そこには、おもわず見惚れるほどかわいい女の子がいた。
しかし明らかにおかしかった。
「なんで君は女の子なのに男子用制服をきて、武家みたいな喋り方なの？」
そう聞くと、その女の子は、
「わしは男じゃ！男が男用の制服を着るのは当たり前であろう！」
と怒っていた。
「こいつは木下秀吉（きのしたひでよし）性別はれっきとした、『秀吉』だ。」
雄二がそういうと、
「だから男じゃと言うとろうにー！」

とまた怒っていた。
「席に着け、これから授業を始める。」
ガラッ、と西村先生が入ってきた。
「えー、授業に入る前に一つ連絡事項だ、2時限目の現国はなくなる。召喚獣の再調整をするようだ。
着替えなくていいから、体育館に行くように。」
『ざわざわ』と教室が少し騒ぐ。
「にしても快、お前、すごいタイミングで転校してきたな。」
雄二が言った。
「何が?」
と聞くと、
「転校早々、学園の醍醐味が味わえるってことだ。」
ともったいぶるように言われ、
「だから何がだ?」
もう一度聞くと明久が、
「今度やるんだよ、戦争を、さっき話してた召喚獣戦争をね。」
と言って快の問いに答えた。

俺とクラスと友達と・・・、（後書き）

みなさんこんにちは、夜ならこんばんは。
ついに主要メンバーを登場させることができました！
次回から、対Ｄクラス戦が開始されていくので、おたのしみに！

俺と検査と丸腰と・・・、

１時限目の英語は、西村先生が少し遅く来たこともあり、プリント学習になった。
（どれどれ・・・）
快は送られてきたプリントに目を通す。そこには、バラバラの単語をつなげて文を書く問題や、英文の読解問題があった。快はなぜかすらすら解くことができ、あっという間に終わってしまったので、自分の記憶について考えていた。
（俺はどうやら自分自身の記憶は生年月日と家族がいないことしかないが、学力はそれなりにあるな・・・、いや、そんなことよりも、あの紅渡とかいうやつの「記憶はこの世界で集めろ」という言葉も気になる・・・。）
考えていると、
「よし、では今日はここまでだ。全員次の時限は体育館に移動だぞ。」
いつの間にか授業が終わっていた。皆席を立ち、体育館に向かうようだ。
「快、行こう。」
「ああ、ちょっと待ってくれ。」
明久に誘われ、快も立ち上がり、体育館に向かうのだった。
文月学園の体育館は、天井が通常より少し高い程度で、あとはどこにでもあるような感じである。
「じゃあ、召喚獣の再調整を始めるよ。１人ずつ前に出て、召喚獣をだ出しな。」
先に来ていた学園長がそういうと、雄二が発言した。
「おい、ババア、なんでつい最近やったばかりの調整をまたやるんだ？」
後ろから学園長をババア呼ばわりする雄二に快は驚いた。

「まったく・・・、ババアと呼ぶなと言ってるだろ、毎度毎度。」
嘆息しながら答える学園長は、不満げにこう答えた。
「召喚システムに異状が生じてね。閲覧不能な正体不明のデータがシステムに食い込んでるんだよ。あんたたちクソガキどもの召喚獣に異状がないか確認だよ。」
「正体不明？消去できないのか？」
「ああ、消去しようとしても全然ダメなんだ。まるでシステムに守られてるみたいで、気味が悪いよ。まったく、誰があんな悪戯を・・・、まあそういうことだ、さっさと召喚獣出しな。」
（召喚獣ってどんなのだろうか・・・）
少しワクワクしながら、快は見ていた。
「サモンッ！」
一番最初に前に出たやつがそういうと、ポンッ！と尾が生えた二頭身ぐらいの人形のようなものが幾何学的な紋様から飛び出した。棍棒に武術家のような出で立ちだった。
「おお」
思わず、感心したように声を出した快は、あることに気付いた。その召喚獣は、呼び出したやつにそっくりなのである。
「うん、異状はないね。次のやつ出な。」
「あ、はい。サモン！」
次に前に出たのは姫路であった。ポンッ！とさっきと同様に召喚獣が飛び出てきた。姫路の召喚獣も、姫路にそっくりで、大きな剣と鎧でしっかり武装されていた。先ほどのより明らかに強そうだった。
「・・・異状なし。次。」
数人検査していよいよ快の番になった。前に出ると、周りから
『あいつの召喚獣ってどんなだろうな』
という視線がきた。
「よーし、サモンッ！」
勢い良く叫んだ。そしてポンッ！出てきた召喚獣は・・・なんと武装を一切着けておらず、普通に制服姿だった。

「・・・・え・・・・・？」
一瞬何が起こったのかわからなかった。学園長もきょとんとしている。
「あ・・・、まあ、異状は・・・ないみたいだね。次。」
学園長は次を促した。がっくりとうなだれながら戻った快の横に
「ドンマイ。」
という言葉とともに、雄二と明久がやってきた。
「すごかったね、快の召喚獣、雄二のより丸腰だったよ。」
「ああ、俺のはメリケンサックがついてるからな。」
「・・・武装があるだけマシだろ・・・ハア。」
ものすごい落ち込み様の快を励まそうと話しかけたが、さらに快を傷つけた。
「あ！あそこにフィールドがあるから、快、ちょっと手合せしてよ。外見だけで、意外と強いかもしれないよ。」
フォローするように明久が快の背中を押した。
「あ、ちょっと・・・」
快は半ば無理矢理、フィールドの中に入った。
「いくよ～、サモンッ！」
「どうなることやら・・・、サモンッ！」
フィールドに改造学ランと木刀の明久の召喚獣と、清々しいほど丸腰の快の召喚獣が現れた。
『総合　天野快　４８６点
　吉井明久２９３点』
お互いの点数が表示される。
「先手必勝！、いくよ、快！」
思い切り踏み込み、木刀で鋭い突きをしてきた明久の召喚獣の攻撃を防ぐために、腕を前でクロスさせた快の召喚獣は、ドッ！と腕で受け止めようとした。ズキリ、と腕に衝撃が来る。
「グッ！」
腕に痛みを覚えたがこらえようとする。だが、

「ハァァ！」
さらに前に押され、吹っ飛んでしまう快の召喚獣はそのまま快に目掛けて飛んできた。その時、快の頭の中ににディケイドライバーが浮かんだ。一瞬、それに意識を集中してしまい、
「危ない！！」
自分の召喚獣が飛来するのをよけれなかった。
「グハァッ！」
思いっきり快の腹に直撃した召喚獣はそのまま快もろともフィールドの外に飛び出し、そのまま明久の勝利となった。
「あれ・・・、勝っちゃった。」
驚いている明久の近くに雄二が近づき、
「勝っちゃった、じゃねえよこのバカ！素人に本気出しやがって！」
バシ！と思い切り頭をはたいていた。
ギャーギャーと2人が言い争っているところに、学園長がやってきた。
「おかしいねえ、召喚獣が実体化するのは吉井1人のはずなんだけどね。」
不思議そうに仰向けに倒れている快の横で腕を組んでいる。
手に持っていたノートパソコンで快の召喚獣をチェックし、何も異状がないことを再確認する。
「召喚獣の設定はランダムに決まるからね、あんたのは実体化して、痛みがフィードバックして、丸腰、っていう設定になったんだろう。ま、こればかりはどうしようもないね。ほら、じゃあもう全員教室に帰んな、授業に遅れるよ。」
パンパン、と手をたたき、教室に帰ることを促している。
「ちぇ、もっと強そうなのがよかったな。」
「悪いな快、こいつはどうも手加減というものを知らないらしい。」
「ごめんね、快。痛かった？」
「ああ、大丈夫だ。気にするな。」
笑ってみせる快に、ホッとしたように笑った明久と雄二であった。

そして自分だけが残った体育館で学園長は、
（おかしい、あれほどの点数があれば何か武装があってもおかしくない、一体何が原因だろうね？）
と、快が弱い原因を模索した。
　時間は少し戻り快が初めて召喚獣を出したとき教室では、ポウッ、と快の鞄の中に入っていたディケイドライバーが淡く光を放っていた。それはすぐに収まったが、何かに反応しているようだった。
別の場所では、一人の中年男性が
「おのれ～・・・許さんぞあの小僧！」
と激昂していた。すると、男の体の形がだんだんと人の形を失い、緑色をした、虫とも人とも見れない姿に変貌するのだった。

俺と検査と丸腰と・・・、（後書き）

どうもみなさんこんんちは！
ついに快の召喚獣がお目見えです！丸腰設定でしかも明久と同じ状況となっていますが、これが後後重要になっていきます。
そして快に迫る不穏な影、次回もお楽しみに！
感想お待ちしてます！

俺と飯と化学兵器と・・・、

快の召喚獣がものすごく弱いことが判明して、3時間ほどたった。
今はお昼休みである。
「・・・そういえば飯持ってきたっけ？」
快は先ほどのことから立ち直り、明久たちと昼食をとる約束をしていた。したはいいが、自分が食べ物を持っているか定かではないことに今しがた気づいた。ガサガサ、とディケイドライバーを見られないように注意しながら漁ると、
（！）
声にも顔にも出さなかったが、鞄の中に先ほどまで入ってなかったパンがあった。
《漢のヤキソバパン！！》
と袋に書いてある鞄にギリギリ収まる大きな焼きそばパンだった。
（なんでだ、さっきまで入ってなかったぞ・・・。）
まあ、でも。とあまり気にせずそのパンを持って、明久達が集まっている教室の隅に向かった。
「お待たせ。」
「あ、快、こっち座って。」
明久は、自分の隣を示した。
「サンキュ」
快はそれを受け、明久の隣に座る。明久の膝の上には、弁当箱が置いてあった。明久は、なれた手つきで包みを開き、弁当箱を開けた。
「！」
快はその中身に絶句した。なんと、弁当箱の中身は乾麺を半分に切ったものだった。
「いただきます。」
丁寧に手を合わせてから、乾麺をバリボリと食べる明久に驚き、近くでそれを見ていた雄二に聞いた。

「なあ、こいつの飯っていつもこうなのか？」
「ああ、そうだな。まあこれでもマシなほうか。この前は塩だけだったことがあったぞ。」
「塩だけ・・・」
「流石にあの時はみんなで弁当分けてやったな。」
「ごちそうさま。」
いつの間にか食べ終わっていた明久の前に近づき、
「食うか？」
焼きそばパンを半分差し出すと、
「いいの！？ホントに！？ありがとう！すごくうれしいよ！」
と半泣きで感謝された。そこに・・・
「あの、明久君、よかったら私の作ってきたクッキーも食べますか？」
小さな包みを持参して姫路がやってきた。すると明久は、
「あ・・・、ああ、その・・・気持ちだけ受け取るよ・・・。」
と姫路から目をそらして言った。
「あ・・・そうですか・・・。」
残念そうに戻ろうとする姫路をみて、
「おいおい、明久、さすがにそれはかわいそうだろ。姫路、俺にも一個くれ。」
快は包みに手を伸ばし、クッキーを手に取り、口に運んだ。
『や、やめろー！』
雄二と明久の声が聞こえたが、快はもうクッキーを咀嚼していた。
「うん、なかなかうまいじゃ・・・」
バタン！言葉の途中で快は倒れて、そのまま動かなくなった。
「だから言ったのに、ったく・・・」
雄二が言い、
「あれ？明久君、天野君が動かなくなっちゃいましたけど・・・」
姫路が明久に問い、
「え～っと、あの・・・、きっと美味しすぎて昇天しちゃったんだ

よ！ねえ！雄二！」
「あ・・・、そ、そうだな、うん、そうに違いない。」
「そうなんですか？美味しくて倒れちゃったんですか？」
3人はそんな会話をしていたが、ガバァッ！と言葉のとおり、昇天していた快が目覚めた。
「なんだ、今のは！？」
「あ、起きた。」
「案外、頑丈だな。」
「あれ、俺、明久にパン分けて、そしたら姫路が来て・・・、あれ？」
「あの～、天野君、大丈夫ですか？」
目覚めた快に、三者三様の言葉をかけるすると、キーン、コーン、カーン、コーン、と予鈴が聞こえた。
「あ、授業始まっちゃいますね。じゃあ私はこれで。」
姫路が戻ろうとする姫路を見送り、
「なんだったんだ、あれは・・・」
と感想を述べる快に、
「あれは姫路の化学兵器だ。」
と雄二が答えた。
「化学兵器！？俺、そんなもん食ったの！？」
「まあ、化学兵器って言っても、作り方がちょっと違うだけなんだけどね・・・」
「どんだけオリジナリティ溢れた作り方したら化学兵器になるんだよ！？」
そんな会話を姫路に聞こえないようにしていると、
「あ、もう一個食べます？」
姫路が聞いた。それに男3人は、
『あ、ああ、いや大丈夫。』
と力なく答えるだけであった。

俺と飯と化学兵器と・・・、（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます！
ごめんなさい！まだちょっと戦争編には入れませんでした。
転校初日に姫路の化学兵器を味わった快は次回ついに初変身です！
次回もお楽しみに！

「じゃあ、またね。」
「ああ、またな。」
快が姫路の手作りクッキー（化学兵器）を食べてから、時間は経ち、放課後、快は明久と一緒に帰ることを誘われ、共に下校した。快は電車なので駅の前で別れた。
（まあ、初日にしては、よかったかな。）
と思いながら、快は電車に乗り込む。
（そういえば、今朝は、姫路を痴漢から助けたっけ・・・）
（そうそう、明久があのエロ本の話したら、島田にプロレス技かけられてたな。）
（そしたらムッツリーニがそのエロ本みて鼻血吹いてたな、あれはビックリした。）
そんな他愛のないことを思い出しながら窓の外の風景を見ていると、鞄の中の固い感触、ディケイドライバーが快を現実に引き戻した。
（破壊者、か・・・）
快は、自分の置かれた状況を確認した。快には、彼、紅渡の言葉が引っ掻かっていた。
『記憶がないようなら、この世界で集めてください。』
という言葉について、快は疑問を持った。
（俺の記憶がこの世界に散らばっている?もしそうなら、どうやって集めるんだ?）
快は渡に聞きたいことがまだたくさんあるのだ。なぜ、俺は記憶を失ったのか、なぜディケイドになったのか、など挙げていけばキリがない。
　そうこうしている間に電車は快の降りる駅に着いた
（まあ、気にしてもしょうがない。次にあいつに会ったら聞こう。）
そう考えをまとめて、下車し、改札を通り、駅を出た快は一歩目で

立ち止まり、
「あ」
と思わず声を出した。とんでもないことに気付いたのである。
（どうやって、帰るんだ・・・？）
そう、快は渡と別れたあと、気が付けば電車に乗っていたのだ。電車の往復は、定期券に書かれていた駅を利用しただけである。どうしようかと途方に暮れていると、ポウ、とディケイドライバーが淡く光った。
「？」
それに気づき、鞄を覗いた快の脳内に、
「！」
早送りのような映像が流れた。堰から水が流れるような感覚を覚えた時には、快は帰宅ルートを完全に把握していた。いや、思い出したと言うべきか。
「こういう時、変に気が利くな、お前は。」
そう言いながら、快は駅を後にしたのだった。
しばらく道を歩いていると、路地裏から、
『いや！離して！』
『おとなしくしろ！』
と、何やらただならぬ雰囲気の会話を耳にした快は、路地裏を覗き込んだ。
「！！」
そこには中学生のような女の子の腕を1人の男が掴んでいた。快が驚いたのはそこではない、腕を掴んでいる男のほうである。
「あいつは・・・！」
その男は、快が今朝、姫路を助けた際に姫路に痴漢をしていた中年男である。
「おい！何やってんだ！！」
快がそう叫ぶと、男はバッ、とこちらを見た。
「お前、まだ懲りてねえのか！」

快がそう言って近づこうとすると、
「チッ！」
と舌打ちをして、襲われていた女の子を引っ張りながら、走って逃げた。
「逃がすかよ！」
快も追いかける。
狭い路地を走り、男を追い、着いたのは廃工場のような場所だった。
辺りを見回すと、廃材を積んだところに、女の子が横たわっていた。
近づこうとしたその時、ザッ、と中年男が快の前に立ちはだかった。
「この俺の楽しみの邪魔しやがって・・・！」
激しく怒っている男に快は、
「へっ、女の子を撫でまわしてるようなことが楽しみなんて、お前、人として恥ずかしくねえのか？」
とわざと挑発するように言った。すると男はニヤ、と不敵に笑った。
「残念ながら、俺は人じゃないんでな。俺は人間なぞよりもはるかに上の存在だ。」
「は？何言ってんだ？明らかに下等だろ。」
「減らず口が言えるのもそこまでだ！」
そう叫ぶと、男の体が見る見る変わっていった。その体は緑色に変化し、腕には長い鉤爪のようなものがついていた。
「なっ！？」
「ククク・・・、俺はワーム、人間に擬態し、その命を奪う、この姿、見られたからには貴様を生きては帰さん！」
ビュン！と鉤爪が快へ襲い掛かる。快は横っ飛びでそれを躱し、近くに転がっていた鉄パイプを手にし、振り上げながら立ち向かう。
「ヤアッ！」
ガキィン！ワームの頭部に鉄パイプがヒットする。
「どうだ！」
「ふん、そんなもの効かん！」

バキッ！快は思い切り殴られ盛大に吹っ飛び、鉄パイプを落としてしまう。
「ぐあっ！」
地面に叩き付けられる快に、ワームは笑い、
「クク・・・、すぐに楽にしてやる！」
ビキ・・・ビキビキビキ！と体に亀裂が入り、また体が変わった。
フォルムは先ほどより細くなり、背中には虫のような羽が生え、両腕にはカマキリのような鋭い鎌がついていた。
ザシュッ！と鎌を快目掛けて、振りかざす。何とかよけるが、今度は蹴りが快の顔面にヒットした。
「ガッ・・・」
またもや吹き飛び、ボロボロになった快の周りに鞄の中に入っていたものが散乱する。
「貴様のような子供に、《クロックアップ》を使うまでもない。なぶり殺しにしてくれる。」
ゆっくりと近づいて来るマンティスワームを前に、
（何かないのか・・・）
圧倒的に不利な快は、何か役立ちそうなものを探す。すると、
「！」
近くにディケイドライバーが転がっている。そしてそれに吸い寄せられるように手に取った。そして、
「こうなったら、ダメもとだ！」
快はディケイドライバーを腰につけた。すると、勝手にドライバーは腰に巻きつき、その横に何かが着いていた。《ライドブッカー》という言葉が頭に響き、それを開いた。また、記憶が戻る。
（懐かしい・・・、俺はこれを使うときいつもこう言っていた。そうだ、あの言葉だ！）
快は、ライドブッカーの中から一枚のカードを取り出し、ワームに見せるように構えた。
「バカな！？貴様、まさか！」

マンティスワームは一歩後ずさった。
快は深呼吸して、叫んだ。あの言葉を、人々を守る戦士が言っていたあの言葉を。
「変身！！」
ドライバーを回転させ、カードを入れる。そしてまたドライバーをもとの位置に回転させた。
《カメンライド・・・ディケイド！》
電子音が響き、快は灰色の装甲に包まれ、それはマゼンタのカラーになり、その姿を現した。
「これが・・・ディケイド・・・！」
世界を破壊し世界を創造する力を持った戦士、『仮面ライダーディケイド』がこの世界に降り立った。

俺と仮面と変身と・・・、（後書き）

みなさん、お待たせしました！
仮面ライダーディケイド、いよいよお目見えです！いやあ、長かった！
次回はディケイド対マンティスワームのバトルをお見せします。
ご期待ください！

俺とバトルと仮面の力と・・・、

「これが・・・ディケイド・・・！」
快は自分の姿に驚嘆する。一方マンティスワームは
「バカな！貴様、仮面ライダーだったのか！？」
と驚愕を露わにし、おもわずそう独りごちた。
仮面ライダーという言葉が、頭に響き、快にまた新たな記憶がよみがえった。怪人の種類と、その知識、そして、戦い方である。快はライドブッカーを開き、一枚のカードをドライバーに装填した。
《アタックライド　ブラスト！》
電子音が鳴り、ライドブッカーはガンモードとなり、快はその引き金を引いた。
「くらえ！」
銃口から無数の光弾が打ち放たれ変則的な軌道を描きながらマンティスワームの両腕の鎌に命中する。
「グアァッ！」
鎌が粉々に砕け、自身もがれきの山に突っ込んだワームはがれきをまき散らしながら立ち上がった。
「おのれ・・・、こうなれば！」
快に走り出したと思った次の瞬間ワームは見えなくなった。消えたのだ。正確に言えば、人には見えない不可視の領域に到達する能力、クロックアップを発動したのだ。快が反応するより早く攻撃に転じたワームは正面、横、後ろからと攻撃をたたき込んだ。
「ウワァ！」
快は攻撃を受け、ワームより後方に吹き飛ばされる。快はクロックアップに対応できるカードを考えながらブッカーを開き、カードを取り出した。するとこの状況では中々ありがたいカードが出てきた。
「ヘッ、１０秒でカタをつけてやるぜ！」
《フォームライド　ファイズ！アクセル！》

電子音が鳴り、快が姿を変えた。仮面ライダーファイズの高速移動形態、『アクセルフォーム』となった快は腕のアクセルウォッチのスイッチを押した。「１０」の文字が出てくる。

『ＲＥＡＤＹ　・・・ＧＯ！』

快はアクセルフォームの力を完全に把握していた。１０秒間だけ超高速移動が可能となるが反対に言えば、１０秒で決着をつけなければならないことも分かっていた。

「ハアァッ！」

快はワームに接近し、パンチやキックを浴びせた。

「グッ！」

ワームがよろけたところに、強い蹴りを入れ、上空に蹴り上げる。

ここまでで４秒使った。残り６秒。

快は新たなカードを取り出した。そして装填する。

《ファイナルアタックライド　ファファファファイズ！》

快もワームを追うように跳躍し、それを追い抜く、するとワームの周りには、赤い円錐のような光がワームを取り囲むように点在した。

そこに鋭い飛び蹴りを浴びせ、着地し、標的が落下する前に、また飛び上がり、蹴りつけるという動作を超高速で行うことで、快が何人もいるように見えるようになる、『アクセルクリムゾンスマッシュ』を浴びたワームが落下する前に

『３・・・２・・・１・・・』

とカウントダウンが差し迫り、

『ＴＩＭＥ　ＯＶＥＲ』

の音声とともに、ワームが空中で爆散した。

戦いが終わり、快は変身を解いた。

「すごい・・・これがライダーの力・・・。」

そう言うと、意外な返事が返ってきた。

「お見事です。ディケイド。」

振り返るとそこにはあの青年、紅渡の姿があった。気が付けば、周りの風景も廃工場からあの地球が幾つもある宇宙になっていた。

「そうです、これがディケイドの力、ライダーの力を完全に手中に収め、使用する。破壊者でもあり、創造者でもあるから可能なのです。」

渡は語り始めた。快は、彼のペースに流されまいとこちらから質問を投げかけた。

「ああ、確かにすごい。だが、なぜ俺はこの力を使える？なぜ俺はディケイドなんだ？」

すると渡は意外そうな顔をしてから、フッ、と微笑んだ。

「そうでしたね、まだあなたに伝えていませんでしたね。分かりました、お教えしましょう。」

言うと、また風景が変わった。

荒野に2人の戦士が向かい合っている。ディケイドと、黒いクウガ、クウガアルティメットフォームである。互いの拳に力を籠め、同時に激突する。

「・・・、この風景はこの前見たぞ。」

快は言うが、渡は気にせずという感じで、

「はい、しかし次が重要です。」

と言ってそのビジョンを見るよう促した。快は、2人の激突の続きを見た。

大きな爆発が起こり、辺りが煙に包まれる。煙が晴れると、ディケイドとクウガは仰向けに倒れていた。どうやら相討ちらしい。すると、ビキ！ビキビキビキ！バガァン！と空に大きな亀裂が入り、一部が砕けた。ゴォォォォォ！ものすごい勢いでその穴の中に吸い込まれていくディケイドとクウガ、

「あなたとクウガの激突のエネルギーで世界を保つ力が不安定になり、世界に亀裂が生じた。」

快と渡も追うように亀裂に入っていく。ディケイドとクウガは互いに別々の方向に飛んで行った。すると、共に吸い込まれた岩がディケイドをかすめ、ライドブッカ―が開いた。バサバサとカードが散らばり、ディケイドを取り囲むように展開した。そしてそのままデ

ィケイドは1つの世界に落ちて行った。そこでビジョンは終わった。
「ディケイドが落ちて行った世界はどこだかわかりますか？」
渡が問い、
「・・・、俺がいる世界・・・。」
と答えた快に
「そうです、見つけるのに苦労しましたよ。はるか遠く、ライダーとは関係ない世界にいたんですから。」
と話す渡に快は業を煮やし、まくしたてるように言った。
「だからなぜ俺はディケイドなのかと聞いてるだろ！！」
すると、渡は落ち着いてこう答えた。
「ディケイド、あなたに記憶を集めるように言ったのは僕です。しかし、まだ知ってはいけない記憶もある。それを知ってしまえばあなたはあなたでなくなるかもしれません。」
一瞬、どういうことだ、と言いたくなったが、何やら、先ほどとは違う雰囲気に圧倒され、閉口している快に、今度は優しく微笑みながら言った。
「あなたには、そんなことよりやらなければならないことが沢山ある。先ほどの戦い、あなたはワームと戦い勝ちました。しかし問題はそこではなく、なぜワームがいたかです。」
「！」
快は瞬時に理解した。
「そうです、先ほど見せた世界の亀裂を通り、あの世界までやってきたのです。あなたにはそれを駆逐してもらいたい。あなたにはすでにあの世界との関係が出来上がっている。」
快の脳裏に明久や雄二達の顔が浮かぶ。
「・・・・・、分かった。」
沈黙し、短く答えた快に、安心したように笑い、
「では、頼みましたよ。あなたの力で守ってください。あの世界を・・・」
そう言い、立ち去ろうとする直前

「あ、教えてあげれなかった代わりと言ってはなんですが、プレゼントを用意しておきました。楽しみにしておいてください。では。」と言い、渡は今度こそ立ち去った。風景もいつの間にか路地の入口まで戻ってきていた。

「・・・、やってやるよ、くそったれ。」

快は小さくつぶやき、決意を固めたのであった。

俺とバトルと仮面の力と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！
快、初勝利です！書いていて興奮しました！最後のアクセルクリムゾンスマッシュは私の好みです。
次回からは、いよいよ、長かった序章を終え、戦争編が始まります。
お楽しみに！

俺とバイクと俺ん家と・・・、

マンティスワームとの戦いからしばらく経ち、快は自宅のすぐそこまで来て、ふと思い出した。

「・・・そういえば、プレゼントってなんだ?」

楽しみにしていろ、と言われたのでそれなりに楽しみにしながら自宅の前に着くと、玄関前に大きなバイクが置いてあった。

「・・・もしかしてこれか?」

そのバイクに触れると頭に『マシンディケイダー』という言葉が響いた。これは、ディケイドが乗るバイクのようだ。

「プレゼントというのはお前か?」

冗談交じりに話しかけてみた。すると、ブオォン、と、まるで肯定するかのようにアイドリングした。キーも刺さってないのにもかかわらず。驚いた快はしげしげとバイク、ディケイダーを観察しあることに気付いた。鍵穴がないのである。ならばどうやって先ほどアイドリングしたのか、考えていると、さらに気付いた。座席部分から見ると、視界の下にディケイドのマークがあり、それに触れると、ディケイダーは小さくなり、快の手の平の上に収まるサイズになった。

「まあ、場所取らないから便利だな。」

そう切り上げ、扉を開き、ディケイダーを手に家に入る。リビングに入ると、もう一つ重大なことに気付いた。

「・・・そういえばバイクもらったのは良いんだけど、免許は・・・?」

そう、バイクに乗るには、免許も必要になってくる。しかし、その心配は杞憂に終わった。テーブルの上に封筒が置いてある。開けてみると、免許証、しかも快の名前で記名されていた。その免許証に触れた途端、快の頭にまた堰を開け流れ出る水ような感覚が感じられた。その感覚が終わるときには、快は免許取得に必要な知識をす

べて記憶していた。今ならどこでも行けそうな感覚もあった。
「便利だな。やっぱり。」
と、口にすると、カサ、ともう1つ何かが封筒から出てきた。またさらに一回り程小さい封筒であった。開けると手紙が入っていた。封筒の裏には『紅渡』の名前があった。文面は
『プレゼントは気に入りましたか、ディケイダーは燃料を積んではいません。クラインの壺と呼ばれる機関から無尽蔵にエネルギーを取り出せるので、ガソリンスタンドに行く必要はありません。そして、あなたの意思がなければ動かないようになっています。あなた以外は動かせませんからあしからず。』
「まあ、そういうことなら」
快は、このプレゼントをありがたく頂戴することにした。
「さて、いつまでも制服姿じゃアレだな。着替えるか。」
そう思い、2階に上がり、自分の部屋に入った。ここですぐに快の部屋と分かったのは、2階の扉がすべて開いており、1つの部屋以外には何も置いてなかったからである。自室は、1人用ベッドがあり、勉強机があり、ベッドと、机の近くには窓があり、クローゼットが部屋の入ってすぐのところにあった。広さとしては、広すぎず、狭すぎない、それくらいの広さだった。クローゼットを開き、Tシャツとジーンズに着替えた快は、自分の家を探検することにした。2階は快の部屋以外は空で、それほど気にはならなかったが、1階はまだちゃんと見ていなかったのでまずは台所から捜索した。
「どれどれ。」
ガラッと棚の扉を開けると、パスタや調味料などが出てきた。食器棚には皿はもちろん、箸、スプーン、フォーク、ナイフなどがあった。
そして、冷蔵庫を開くと、卵、飲み物、肉、野菜などがきれいに整理されて入っていた。量もそれなりにあり、食糧不足はないらしかった。
「ふむ。」

次はリビングのテーブルの横にある棚を開けた。そこには『〇?銀行』と書かれた封筒が幾つかあり、開くと小銭、千円札、五千円札、一万円札に分けられて入っていた。どうやら貯金もできているらしく金欠というわけでもなさそうだった。

「結構、マメなやつなんだな、俺って。」

家を一通り探検した後、小腹が空いたので、もぐもぐと菓子パンを食べながらテレビをつけると、

『任務了解、これより破壊する。』

とアニメが放送されていた。タイトル表記は『新機動戦記ガンダムW』。再放送らしく、画は少し古い。

「へえ、結構面白いじゃん。」とかいいながら、菓子パン片手に快は『ガンダム』を見るのであった。

俺とバイクと俺ん家と・・・、（後書き）

みなさん、こんにちは！夜ならこんばんは！
今回は快の家の詳細を説明しながら、快がバイクを手に入れるお話を書かせていただきました。ほんの少しだけガンダムが登場しました！
次回は、快が自分の召喚獣の秘密を知ります。
ご期待ください！

俺と模擬戦と召喚獣の変身と・・・、

日付が変わって次の日の朝、
「・・・おはよー・・・」
快はげっそりとした顔で教室の障子を開けた。
「どうしたのさ、快、なんかやつれてるよ？」
心配そうに話しかけてくる明久に、
「ああ、まるで徹夜の後みたいだぞ。」
と雄二もやってきた。
「いやな、昨日家に帰ってテレビ点けたら、めちゃくちゃ面しれえアニメやっててよ・・・見まくっちまった。」
答える快は、昨日あの後、アニメ、『ガンダムW』を見続け、どハマリしてしまったのだ。しかもなんとそれは、１８時３０分から朝の５時３０分まで一挙放送というとんでもない長時間スペシャルだったのである。途中、食べ物は食べたが、何を食べたかすら覚えてはいないほど、食い入るように見てしまったのだ。おかげで、快はビックリする位寝不足である。
「へ・・・へ～、快って結構ハマるととことんハマるタイプなんだね・・・。」
快の意外そうな一面を見て、驚く明久と、
「まったく・・・、転校初日から何やってんだか・・・。」
とあきれる雄二、それに反抗するように
「おいおい、ウイング０はすげえんだぞ。ツインバスターマジパねえ。」
と全く説得力のない発言をする快。そこに、
「まったく・・・、おぬしは戦争前に何をやっとるんじゃ。」
と男装した美少じょ・・・じゃない１人の男子、秀吉がやってきた。
「あ、秀吉。おはよう。」
「よう、秀吉。」

挨拶を交わす明久と雄二、快も少し遅れながら
「ああ、おはよう秀吉。」
と言葉をかける。
「そうだぞ、快、今度の相手はDクラス、それほど賢くはないが、俺たちよりは数段賢い。今日は、一日何もないからな、みんなで模擬戦をやろうと思って呼んだんだ。」
「ああ、分かってるって。」
昨日、帰り際に、雄二、明久、ムッツリーニ、秀吉等とアドレスを交換した快は、今日の朝、ガンダムを見終わり、シャワーを浴びて一息ついたところで、雄二からメールが来て、こうして休みの日に、学校に来た次第である。
「ババアからは申請は取ってある。午前中だけなら体育館を使っていいんだとよ。」
「ふうん、それにしても、よく許可がおりたな。」
「以前から考えていたことだしな。ババアからすれば少しでも多くのデータを取っておきたいんだろ。」
「そういうことか、まあでも、俺、召喚獣がアレだしな・・・。」
と肩をすくめる快の脳裏にはあの丸腰で制服姿の自分の召喚獣が思い出される。
「まあ、その点についても、もう少し調べてみようと思う。鍵は姫路と島田・・・後ムッツリーニが取りに行ってるから、俺たちも行くぞ。」
そう言って、教室を出ていく雄二を追って3人も体育館へ向かった。
そして、体育館で姫路、島田、ムッツリーニと合流し快達は早速模擬戦を始めることにした。
「召喚許可はババアからもらってるし、フィールドもタイマー式で12時まで使えるようにしておいてもらってる。点数は模擬戦だから無制限だ。行くぞー。」
「「「「「「「「「サモン！」」」」」」」」」
全員の召喚獣が幾何学的な紋様から飛び出す。明久、雄二、姫路の

召喚獣は検査の時に見たことはあったが、秀吉、島田、ムッツリーニの召喚獣は見たことがなかったので、快はチラ、と彼らの召喚獣を見る。秀吉の召喚獣は侍のような姿で、日本刀を持っている。島田のは軍服にサーベルという姿。そしてムッツリーニは忍者のような姿に小刀というそれぞれしっかりした装備を着けている。

「それに比べて俺は・・・」

快の前には丸腰制服姿の召喚獣がいる。やはりとても頼りない。

「じゃあ、とりあえずウチとアキが見本を見せるから見てて。」

と島田が前に出る。

「え、僕？まあいいや、よーし、こい！美波！」

明久も召喚獣に木刀を構えさせる。

「行くわよー、それっ！」

島田の召喚獣が明久の召喚獣に肉薄する。ガン！ガキン！とサーベルと木刀がぶつかり合う。しかし、所詮、木と鉄である。明久の召喚獣の木刀はすぐに折れ、明久はピンチに陥る。ビッ！とサーベルが明久の召喚獣の首元に置かれる。

「勝負ありね。アキ。」

「くッ、やるじゃないか美波！」

「と、まあ、ざっとこんなもんかしら。」

召喚獣を消して島田が言う。

「すごいよ美波、扱いが前より上手くなってるね。」

と明久がほめると、

「え！、そ・・・そう？」

と照れるような仕草をし、顔を赤らめた島田。すると

「お姉さまに近づく豚め・・・、殺す！殺します！」

「うわあ！？」

快の横に黒いオーラを放ち、明久を睨んでいるの女子がいた。そしておもむろにシャーペンを取り出し、それを投げナイフのように明久に向かって投げた。

「危ねえ！」

咄嗟に手でそれを払った快に、
「何するんですの!?」
と食って掛かる女子に、
「それはこっちのセリフだ!そんなもん人に投げようとして!」
快は強く言った。
「美春!!」
と美春と呼ばれた女子に島田が近づいた。すると、
「お姉さま!大変凛凛しゅうございましたわ!」
と先程とはまったく違うキラッキラした目で島田を見ていた。
「島田、知り合いか?」
快が問うと、抱きつこうとしてくる女子を抑えながら
「うん、清水美春(しみずみはる)って言うの。いつもウチにこうやってくるから大変なの。」
「何を言ってらっしゃるんですの!私はお姉さまとの愛を確かめているだけですのに!」
「アーッ、もう抱きつかないの!」
グイーッと引きはがされ、ふと目があった快を見て、清水は島田に聞いた。
「お姉さま、誰ですの?この見慣れない薄汚い豚は?」
「豚って・・・。」
「ああ、こっちは昨日転校してきた天野快っていうの。」
「おい、豚のところスルーか!」
「ふうん、転校生でしたの。道理で見かけない面だったわけですわ。ま、戦争前に転校生の1人や2人来たところでこの私が軽く捻ってやりますわ。」
自信あり気に清水が言う。
「自信満々じゃねえか。言ってくれるね。」
快が言い返すと、
「ええ、なんなら今ここで模擬戦の相手をして差し上げてもよろしいですわよ。」

とさらに言ってきた。そして、快の足元の召喚獣を見て、フッ、と笑い
「まあ、そんな弱そうな召喚獣に負けるはずありませんがね。」
と挑発するように言った。
「いいぜ！相手になってやるよ！」
快はその挑発に乗り、清水と対決することになった。
「ちょっと、雄二、止めなくていいの？快、負けちゃうんじゃない？」
「そうじゃぞ、雄二、勝負は目に見えておる。」
「・・・無謀。」
「そうですよ坂本君、天野君の召喚獣は痛みのフィードバックがあるんですよ？」
「そうよ坂本、美春のことだからこてんぱんにしちゃうわよ。」
明久たちが快を案じて雄二に抗議する。しかし雄二は気に留める様子もなく、
「いや、このままやらせる。実を言うと、ババアから頼まれててな。あいつの召喚獣についてこっちで調べておけって。まったく、人使いの荒いババアだ。」
と言って2人の対決が始まるのを待っている。そして、
「行きますわよ！サモン！」
清水の召喚獣が出現する。武装は短い剣とローマの兵士のような鎧である。
「一気に終わらせて差し上げますわ！」
清水の召喚獣が剣を振り、快の召喚獣に迫る。
「危ないっ！」
明久が叫ぶ。すると快は
「大丈夫。」
サッ、と必要最低限の動作でそれを避けさせる。そして回し蹴りを相手の横っ腹に当てる。ガン！と音が鳴る。しかし、
「いっっっっっ・・・・・て～～～！」

苦悶の表情で転げまわっているのは清水の召喚獣ではなく快と快の召喚獣のほうである。鎧に蹴りを思い切り当てたのだ。フィードバックで足にものすごい激痛が走る。

「「「「ダメだな」」」」「ダメね」「ダメですね」

と明久たちも微妙にあきれ顔である。

「ふふ、全くと言っていいほどの素人ですわね！」

剣を快の召喚獣に向かって突き刺そうとしてくる。それを横に転がることで何とか躱す。

「ほらほら！避けてるだけじゃ勝てませんことよ！」

清水の連撃を何とか躱し続ける。

「くそっ！何か手はないのか！？・・・ん？」

ふと快は自分が何かを持っているのに気づき、見るとそれは、ディケイドライバーだった。

「なんで！？」

確かに快は昨日のようなことに備え、持ってきてはいたが、鞄の中に入れたはずであった。

「こんな時に、どう使えって、言うんだよ！」

召喚獣を動かしながら、快は考える。すると、ポウ、とディケイドライバーが淡く光り、快の頭にイメージを送った。

「・・・！なるほど、そういうことか！」

快は召喚獣を自分のそばに近づけさせた。

「どうしたんですの？降参するなら今のうちですわよ。」

余裕そうに清水が言う。しかし、快も負けないくらいに余裕ぶりながら、

「へっ、それはこっちのセリフだぜ。」

と答える。

「虚勢を張るのもたいがいにしてください。これで・・・終わりです！」

清水の召喚獣が突進してくる。快はディケイドライバーに力を籠めた。するとディケイドライバーが快の手の中から消え、小さくなり

召喚獣の腰に巻かれた。
「行くぜ・・・変身！」
快が言うと、召喚獣は快のそれと同じようにライドブッカーからカードを取り出し、ドライバーに装填した。そしてドライバーを回転させた。
《カメンライド　ディケイド！》
電子音が鳴り、召喚獣に灰色の装甲がつき、灰色からマゼンタカラーへと色が変わる。召喚獣が小さなディケイドになったのである。
「なるほど、道理で最初の姿が丸腰なわけだ。」
「快の召喚獣の姿が変わった！？」
「すごいです！そういう仕掛けだったんですか！」
「変身とは、さすがに想像できなかったのう！」
「なんだか強そうだわ！」
「見たことがないタイプ・・・。」
明久たちが驚きの声をあげるなか、１人、清水は狼狽した。
「なっ、なんですのそれは！？」
「フッフッフッ、これはな・・・」
と説明しようとしたが、なぜか、心のどこかで、自分がライダーであることを隠せ、と告げる声があった。一瞬悩み、はぐらかすように、
「あー・・・企業秘密だ！！」
と言った。そして、有無を言わせないように、カードを取り出し、ドライバーに装填させる。
《アタックライド　スラッシュ！》
と電子音が鳴りライドブッカーをソードモードに変え、召喚獣を突進させる。
「クッ！」
清水は召喚獣に受け止めさせる構えをとらせた。しかし、剣同士がぶつかり、バキィン！と大きな音が鳴ると、清水の召喚獣の短剣は根元からボッキリと折れていた。

「なっ・・・！」
相手が動く前に快はライドブッカーを清水の召喚獣の首元に置かせ、宣言した。
「勝負ありだな。」
シュゥゥンと音を立て召喚フィールドが消えていく。どうやら約束の１２時を過ぎたようだ。あの後清水は「今日は、今度の対戦相手に挨拶をしに来ただけですの。先ほどは驚いて何もできませんでしたが、次戦うときは負けませんわ。」
といかにも負け惜しみ的なことを言って、体育館を後にした。
「しっかし、すごかったな、快の召喚獣。まさかあんな仕掛けがあったなんてな。」
帰り、快は雄二、明久と一緒に歩いていた。快はバイクもあったが今はまだ使っていない。
「そうだね、すごかったよ、一気に決着を着けてたもん。」
「ああ、まあ俺もあの時初めて使ったんだけどな。まさかうまくいくとは思わなかった。」
快は得意げに話している。初めて見たときはすごく弱そうだった自分の召喚獣が本当はすごく強かったことがうれしかった。
３人はわいわいと話しながら学園を後にした。
その日の夜、誰もいない召喚獣制御システムマシン室、そこに、突如、召喚フィールドが出現する。誰もいないはずのこの場所で、なぜフィールドが出現したかは謎である。そのフィールドの中央にゆらゆらとホログラムのような蜃気楼のような、あるいは幻のような、人の影があった。その影は、小さくつぶやいた。
「・・・天野・・・快・・・・・」
そして突然、フィールドはその影もろとも消えてしまった。そこには、稼働していない制御システムマシンが置いてあるだけであった。

俺と模擬戦と召喚獣の変身と・・・、（後書き）

こんにちは！作者です！
召喚獣が変身というとんでもない展開になりました！
これは、この作品を作る前から考えていたアイデアです。皆さん、いかがでしたでしょうか？
そして清水美春が登場です！これからも、どんどん準レギュラーキャラを出して行きたいと思います！
余談ですが、冒頭のガンダムWのくだりは後々ストーリーに関係してくるのでお楽しみに！では、次回にお会いしましょう！

俺と気持ちと開戦と・・・、

快の召喚獣が変身すると分かった次の日の月曜日、今日からDクラスとの戦争が開始される。快は、学園までバイク、ディケイダーで向かった。途中、同じ文月学園の生徒が制服姿でバイクに乗っているのを見て、驚いている数人の学園生徒の姿を見た。学園より少し離れたところで、誰も見ていない事を確認し、ボタンに触れ、バイクを手のひらサイズにして、鞄に入れた。まだ、申請をしてないためあまり騒がれたくなかったからである。

そして教室、そこではFクラスの全員と作戦会議を開いていた。

「いいか、今日からDクラスとの戦争が開始される。俺がクラス代表で問題はないな。」

雄二が慣れた感じでそういっている。快は後ろのほうでそれを聞いていた。

(俺はうまくやれるだろうか・・・)

そう考えていると、

「快は、今回は初めての戦争だからな。自由に動いてくれて構わない。でも無理はするな。」

「あ、ああ、わかった。」

快のほうに視線が向く。快は、そう答え、説明の続きを促した。

「・・・ここは階段から・・・」

雄二は指揮官が似合うな、と快は思った。こういう大勢を動かす能力に長けている。そう思いながら、快は作戦会議を聞いていた。しばらくするとキーン、コーン、カーン、コーンとベルが鳴った。

「もうすぐ戦争が始まる。全員、死んでも勝て!。」

『オウ!』

作戦会議を切り上げ、全員の周りに緊張した空気が漂う。西村先生が入ってきた。

「もうじき戦争が開始される。そのことに関して一つ学園長から注

意事項がある。」
この大事な時間に、なんだろうか?全員がその言葉に耳を傾けた。
「全員、今回は勝つことしか考えていないだろう。しかし、それではつまらないと学園長が提案を出しそれを自分の権限で通した。」
「おい、鉄人、勿体ぶらずはっきり言えよ。」
雄二がそう言うと、
「西村先生と呼べ。そして今から言うから待て。えー、お前たちは今の教室の設備がもう下がらない。そう思っているだろう。しかし、そうではない。学園長は新しいペナルティを用意した。」
「なんだと!?」
雄二が狼狽する。
「お前たちが、この戦争で負けたら、さらに設備がランクダウンする。それが今回のペナルティだ。」
『ナ・・・ナニィィィィ!?』
全員に動揺が走る。
「どういうことですか!?これ以上何が下がるっていうんですか!?」
快も動揺を隠せず鉄人に詰め寄る。
「さあ、私にもそれはわからない。だが、何かしらがなくなるのだろう。では、そういうことだ。全員これ以上設備が悪くならないよう頑張れよ。」
そう言って、教室から出て行ってしまった。
「畜生!ババアの奴、飛んでもねえこと言いだしやがった!」
雄二が悪態をつく。そこに明久が
「どうするのさ雄二、負けたらこれよりひどくなっちゃうんだって。」
とミカン箱を見ながら言う。
「ああ、もう負けられねえぞ・・・!」
「これ以上ひどくなるなんていやだぜ・・・」
「いよいよ、なにもなくなるんじゃねえか、ここ・・・」

皆も口々に、不安の声をあげる。
『・・・・・・・・・』
教室が一気にシュンとなる。すると
「・・・あ～～もうっ！！なに始まる前から負けるみたいな空気出してんだよ！勝てばいいんだろ！！勝てば！！」
快が嫌な雰囲気を払拭するように立ち上がり、叫ぶ。
「俺は転校してきてまだ日が浅いからそんな大それたことは言えねえ！だがこれだけは言える！最初っから士気が低くかったら勝てるものも勝てねえ！勝ちたいんだろ！？だから、皆必死こいて勉強してきたんだろ！？」
快はそこで一度区切り、息を吸った。
「皆、一人一人違う目的があったとしても、勝ちたいのは同じだろ！？だったら・・・！」
快がさらに言おうとすると、雄二がそれを制した。
「雄二・・・！」
「まったく・・・。転校生のくせに言ってくれるぜ・・・。」
そういう雄二の顔はどこか覚悟を決めたようだった。
「どうしたお前ら！転校生にケツ叩かれねえと動けねえなんてそれでもいいのか！？」
雄二が全員に向かって言う。雄二も雄二なりに皆を鼓舞しようとしている。
『・・・』
少しの沈黙が流れ、そして、
「へっ、そんなわけねえだろ！」
「ああ、そうだ！Ｄクラスになんか負けねえ！」
「さっさとこんな汚い教室おさらばしようぜ！」
段々と声があがる。皆に士気が戻っていく。
「やってやろうよ雄二！」
「Ｄクラスの連中に一泡吹かせてやろうぞ！」
「・・・絶対勝つ・・・」

「やるわよー！」
「私もがんばります！」
明久たちも完全に士気を取り戻し、やる気に満ちている。
「よし！俺たちならやれる！行くぞ！！」
『ウォォォ！！』
全員が団結し、士気が最高潮に達したとき、アナウンスが鳴った。
『それでは、只今よりＦクラス対Ｄクラスの召喚獣戦争を始めます。』
短いアナウンスだったがそれ以上は語ることは無かったようだった。
「さあ、Ｆクラス魂を見せてやるぜ！」
須川が教室から意気揚々と出ていき、皆も作戦会議で指示された場所へ向かう。
「じゃ、俺も行きますか・・・」
快が障子に手をかけると、
「ちょっと待て。」
雄二に引き留められた。
「なんだよ雄二。」
快が問うと、雄二は快の肩に手を置き言った。
「快、さっきお前には自由に動いていいと言ったが、あれは嘘だ。」
「嘘？」
「ああ、お前にも役目がある。」
不敵に笑いながら言う。
「とっておきの重要な役目がな。」

俺と気持ちと開戦と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！
いよいよ開戦です！今までなかなか戦争編に入れなくてすいませんでした！
これからもガンガン書いていくのでお楽しみに！
次回は快が戦場を駆け抜けます！
ご期待ください！

俺と初戦と戦略と・・・、

快は教室を出て、手近に戦闘が行われている場所を探してる。現在、雄二に指示された作戦を決行中である。
「しかし・・・、上手くいくのか？」
快は雄二とのやり取りを思い出した。
「いいか、快、お前は今回の戦争の鍵を握っている。お前にはプロパガンダ・・・、宣伝をしてもらおうと考えている。」
雄二が事前に考えていたであろう作戦を伝える。
「宣伝？」
「ああ、お前は転校してきてあまり日がない。おそらくお前の召喚獣は昨日の模擬戦で見せた変身能力がメインだと考えられる。おそらく清水もそのことは伝えてあるだろう。だが、そこを利用する。」
「どうするんだ？」
「おそらく清水の奴は転校生の召喚獣は変身する、とだけしか伝えられてないだろう。それだけじゃ、それほどの脅威にはならない。だからわざとお前は派手に戦ってほしい。お前に派手に戦ってもらっているうちに、こっちでハッタリをかます。」
「ハッタリってどんな？」
「俺たちは、切り札としてとんでもないものを持っている。とだけDの連中に言う。まあ、いきなり、やつらはお前の事だとは思わないだろう。だが、そこでお前が派手に戦場を荒らせばそのハッタリは、本当になる。お前に連中の視線が行ってるうちに、俺たちがDクラス代表を叩く。まあ、言ってしまえば、囮作戦ってことだな・・・やれるか？」
一通り説明が終わり、雄二が確認を取る。快は自信ありげに頷き、その場を立ち上がる。
「ああ、任せろ。一つ聞いておく、相手は全員倒していいんだな？」
「？ああ、それに関しては構わないが、それがどうしたんだ？」

雄二が聞くと、
「いや、あんなことを言った手前、俺も頑張らなきゃと思ってな。」
快はそう答え、教室を出た。
そして現在、快は3人のDクラス生徒と鉢合わせした。
「お前が転校生か！悪いが今回の戦争でお前の出番はなしだぜ！」
「ああ！Fクラスのバカなんぞには負けねえ！」
「ここで戦死してもらうぜ！北山先生！お願いします！」
1人が連れてきたであろう北山と呼ばれた若い先生に声をかける。
「はい、召喚を許可します。」
北山先生が言うとフィールドが展開される
「「サモン！」」
ボンッ！と三体の召喚獣が幾何学的な紋様から出現する。
「サモン！」
快も召喚獣を呼び出す。
『現国　Dクラス　　Fクラス
立場陽一　１１８点
下田幸平　１０３点　　ＶＳ天野　快　１０６点
吉村　清　１１４点』
双方の点数が表示される。
「へっ、それなりに点数はあるみたいだが3対1だ！しかもお前の召喚獣は丸腰！勝ちはもらった！」
スポーツ刈りの男子、召喚獣の見た目から下田というやつか、が剣を構えさせ攻撃を仕掛ける。
「どうかな・・・。見せてやるぜ、俺の力！」
快が念じると召喚獣の腰にディケイドライバーが巻かれる。カードを取り出させ装填する。
「変身！」
快が言い、召喚獣がドライバーを回転させる。
《カメンライド　ディケイド！》
電子音が鳴り、召喚獣の姿が変わる。

「なに！？」
サッ、と剣をいなし、敵の召喚獣の甲冑にパンチを入れる。バガン！と大きな音が響く。見ると、敵の召喚獣の甲冑にひびが入っている。見ると表示された点数が変わっている。
『下田幸平　７８点』
「「何ィ！？」」
３人が動揺している。一発のパンチで点数が激減したのに驚いたのだろう。しかし快は攻撃の手を休めない。ライドブッカーをソードモードにし、一気に下田の召喚獣の懐まで間合いを詰める。
「ハアッ！」
気合の一言とともにライドブッカーを振る。ザンッ！という音と共に下田の召喚獣が袈裟切りにされ、また点数が変化する。
『下田幸平　４６点』
「クッ、こいつ強いぞ・・・！」
下田が声を出す。
「オラオラどうした！そんなもんか？そこの２人もかかって来いよ！まとめて相手してやる！」
「舐めるなぁ！」
叫びながら立場が召喚獣に武装の拳銃を抜かせ、二丁拳銃で快に攻撃し、吉村の召喚獣が薙刀を構えまがら突進する。
それを難なく躱した快は、新たなカードを取り出させた。
「これでフェアに戦えるぜ！」
《アタックライド　イリュージョン！》
カードを使うと、快の召喚獣が三体に分身した。
「「「増えた！？」」」
「さらにこれだ！」
快は三体の召喚獣に別々のカードを取り出させる。
《カメンライド　クウガ！》
《カメンライド　電王》
《カメンライド　アギト！》

三体の快の召喚獣は姿を変え、下田の召喚獣にはクウガ、立場の召喚獣には電王、そして吉村の召喚獣にはアギトが向かい合うように配置される。

「姿が変わった!?」

「おまけにもう一丁!」

快はさらにカードを取り出させた。

《フォームライド　クウガ!タイタン!》

《フォームライド　電王!ガン!》

《フォームライド　アギト!ストーム!》

快はクウガをタイタンフォーム、電王をガンフォーム、アギトをストームフォームにフォームチェンジさせた。

「さあ、ボッコボコにしてやるぜ!」

快の超ド派手囮大作戦（快の勝手な命名）がスタートする。

俺と初戦と戦略と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！
快が召喚獣ディケイドを使いこなせている感じに仕上げるために大量にカードを使わせてもらいました！意図としては、お互いが同じ武器で戦うように使うカードは選びました！次回はさらに戦争がさらに展開していきます！お楽しみに！

俺と囮と増殖と・・・、

「戦死者は補習～！」
「「ちくしょぉぉぉ！！！」」
快に挑んだDクラスの3人は、いつの間にか近くにいた鉄人こと西村先生に連行されていった。
「ふう、ま、こんなもんかな。」
快の戦いは一方的だった。タイタンフォームの能力で下田の召喚獣の武装の剣を奪い、タイタンソードにし、驚いている隙に一気に薙ぎ払い真っ二つにした。そしてガンフォームと立場の召喚獣の戦闘は敵の銃撃をダンスを踊るように躱し、至近距離で連射を浴びさせ蜂の巣にし、吉村との戦闘は、相手の召喚獣の薙刀をストームハルバートで細切れにして無防備になったところを思い切り貫いた。そしてDクラス3人衆の持ち点が0になり、戦闘は終了した。
「さて、次の戦場に急がねえと・・・」
快が歩きだした瞬間
（・・・快・・・）
と女の声が響いたような気がして後ろを振り返る。しかしそこには、西村先生に連行されていく下田、立場、吉村の姿しかなかった。
「・・・？まあ、いいか。」
快はその場を後にした。
「・・・、すげえ、やっぱり3人じゃダメか。」
快とDクラスの戦闘を影から見ている者がいた。清水に頼まれ、偵察として快の戦闘を観察していたDクラスの男子生徒である。
「こうしちゃいられない。すぐに戦力を増やさないと！」
彼はすぐに立ち去った。
「・・・・・」
しかし、彼の後ろにはもう一人彼を見ていた存在があった。
「・・・坂本の言った通り・・・。」

快のクラスメイトであるムッツリーニこと土田康太である。彼は雄二に作戦会議が始まる前から指示を受けていた。快から目を離すな、という指示である。雄二は快に偵察が付き、戦力が快に注がれることを予見し、そのタイミングを見逃さないようにムッツリーニに報告させるように指示を出していた。

「・・・・・」

スーッとムッツリーニは雄二にこれを報せるべく、音もなくその場を後にした。

「・・・以上・・・」

「なるほど、思った通り快に戦力を向けたか。よし、俺たちは今からDクラス代表を叩きに行く。全員準備はいいな?」

雄二が報告を聞き、集まった快以外のFクラスの面々に声をかける。

「いいけど・・・雄二、快は大丈夫かな?」

明久が囮である快のことを案じ、雄二に話しかける。

「大丈夫だ明久、ムッツリーニからの報告では快は結構一方的な戦いをしたらしい。それに、まだまだ余裕そうだったと聞いてる。俺たちはあいつが作ってくれたこのチャンスに一気に勝負をつける。」

「でも・・・」

「心配ないぞ明久よ、あやつなら心配ないじゃろう。」

明久に秀吉が声をかける。

「秀吉・・・」

「それにあやつはなかなかいい目をしとった。囮も上手くこなせているであろう。おかげでわしらはこうして無事集まれたんじゃ。」

「そうですよ明久君、天野君を信じましょう。」

姫路も秀吉の考えに賛同する。

「そっか、そうだね。よし!僕たちも頑張らなきゃ!」

「その意気だ明久、よし、じゃあ行くぞ。」

Fクラスの面々は、打倒Dクラスという目的を胸に、代表がいるであろうDクラスの教室に向かった。

時同じくして、

「うわあ・・・、これはこれは・・・。」
快は廊下の一角から顔を出し、様子を伺っていた。そこにはざっと見積もっても１５人はいるであろうＤクラスの生徒が固まって周囲を警戒していた。
「さて、どうしたものか・・・」
快が様子を伺っていると、
「しかし、すごいなＦクラスの転校生は。」
「ああ、一気に下田と立場と吉村の３人を倒しちまうなんてな。」
「でも、だからってこの人数は多すぎない？清水さん。」
数人の男子と女子の会話が聞こえてきた。話の内容からどうやら清水もいるようだ。
「いえ、あの豚野郎は何か他のＦクラスの連中とは違う感じがしてましたの。これでもまだ少ないと思いましてよ。」
「そうなの？私はまだ見たことがないからよく分からないわ。」
快は悩んだ。先ほどのようにイリュージョンのカードで人数を増やすことはできるが、あれは３体が限界であると快は理解していた。イリュージョンのカードで増やした分身は快の考えた通りに動く。だがそれは召喚獣の戦いで使うとなると相当な集中力が必要だった。召喚獣のコントロールは召喚した本人が所有している。すなわち、１体の召喚獣のコントロールは難しくない、だが複数体のコントロールとなると途端に難易度が上がるということである。
（３人でやっとだったんだ、１５人なんてできるわけがない。仕方ない、こうなったら・・・！）
快は意を決してＤクラス軍団の前に躍り出る。
「！、あら、ごきげんよう豚野郎。さすがのあなたでも一気に１５人は酷じゃなくって？」
清水が余裕そうな表情を浮かべる。
「まったく、過大評価してくれちゃって・・・。ま、まだ俺を倒すには足りないかな。」
と快も負けじと余裕の表情を見せる。

「減らず口が言えるのもそこまでですわ！先生お願いします！」
「はあ、さすがこれは天野君には不利かもしれませんが、本人は平気そうなので召喚を許可します。」
化学の布施先生が召喚を許可したことでフィールドが発生する。
『サモン！』
「サモン！」
ボウンッ！と快の召喚獣の前におびただしい数の召喚獣が出現する。
点数の表示法も変化していた。
『化学　Ｄクラス軍団　１６０８点
　Ｆクラス　天野快　１２９点　』
Ｄクラス側の点数表示が一人一人の点数から合計点に変化されている。
「さあ、叩きのめして差し上げますわ！」
清水の召喚獣が突進する。
「変身！」
《カメンライド　ディケイド！》
快はすぐに召喚獣を変身させ、ライドブッカーソードモードで攻撃を受け止める。
「俺たちも・・・」
「いるんだから！」
男女の２人組が快の後ろに接近し、左右からレイピアとククリ刀で攻撃しようとする。
「危ねえ！」
サッとしゃがみながらそれを躱し、後ろへジャンプして距離を取る。
しかし着地する場所にもう一人いることに気付かなかった。
「掛かったな、くらえ！」
ズバッ！召喚獣の背中をダガーのようなもので切り付けられ、快の背中にもフィードバックの痛みが、容赦なく襲い掛かる。
「ぐっ！」
攻撃を受けたことで、快の召喚獣は一瞬隙ができる。そこに、追い

打ちをかけるように拳闘士タイプの召喚獣の飛び蹴りが襲い掛かる。
なんとか受け止め、後ろに後退するがまだ敵は多く、今度はナイフを、正確に快の召喚獣の目を狙って投げつけてきた。
「当たるかよ！」
難なくそれを躱す。しかしナイフに目が行ってしまい接近するハンマーを持った召喚獣がいることに気付かなかった。
「しま・・・っ！」
「遅い！」
ドゴン！とハンマーが快の召喚獣の体を打ち据える。
「・・・！」
痛みで息ができなくなる。装甲があったとしても打撃系の強い一撃ならダメージが少なくとも衝撃には耐えられない。
「どうですの？少しは効いたんじゃありませんこと？」
清水が余裕の表情で快を見る。
「クッ・・・！」
何とか立ち直り、点数をチェックする。
『化学　天野快　７６点』
確実に点数が減っている。このままではまずい、そう思い、何か対抗手段を考える。するとライドブッカーが勝手に開き、２枚のカードが飛び出す。
「・・・これは！」
「今更何をしようが無駄ですわ！」
清水が召喚獣を快の召喚獣に接近させる。
「これでどうだ！」
快はドライバーにカードを装填させる。
《カメンライド　オーズ！》
快の召喚獣がディケイドの姿から人の欲と戦うライダー「仮面ライダーオーズ　タトバコンボ」に姿を変える。
「なっ、姿が変わった・・・！」
「これも使うぜ！」

快はさらにもう1枚のカードドライバーに装填する。
《フォームライド　オーズ！　ガタキリバ！》
オーズの姿が赤、黄色、緑のカラーリングから緑一色になり、頭部と腕部の形状も変化する。
「姿が変わったからなんですの！？何をして雇こようがこの数なら押し切れますわ！」
清水の顔に少し焦りが見える。快が何か企んでいると察したのだろう。他のDクラスの生徒に一斉攻撃をするように指示を出している。
「ああ、確かにその人数なら勝てるだろうな・・・、ただし！俺がもっと多人数になったら話は変わってくるだろ！」
快はオーズガタキリバコンボの特殊能力を発動する。額の緑色の水晶のようなものが光ると2人に増え2人が4人に、4人が8人に、8人が16人にとどんどん数が増えていく。そして・・・、
「・・・これはすごい・・・。」
「う・・・嘘だろ・・・。」
「こんなのでたらめよ・・・。」
「勝てるわけがねえ・・・。」
驚いているDクラス軍団と布施先生の前には広大なフィールドを大量のディケイドオーズGKが立ちふさがっていた。だが、快は分身した召喚獣の制御は3人が限界のはずである。しかし、それはイリュージョンの場合であり、ガタキリバの分身は一体一体が自立行動をとることができる。よって、イリュージョンのように集中する必要がなくなるということだ。しかも、召喚システムはこれを快1人の行動であるとし、すべての分身に快の残りの点数76点が与えられた。
「さあ、こっからが本番だぜ！」
快は召喚獣に攻撃の指示を出す。ドドドドド！と大量のディケイドオーズGKが完全に人数差を逆転させたDクラス軍団に迫る。
「う、うろたえてはいけませんの！相手は所詮Fクラス！どうせこれもハッタリですわ！」

清水が他のDクラスの生徒に声をかける。しかし、清水の発言はすぐに否定される。
「これで終わりだ！」
《ファイナルアタッククライド　オオオオーズ！》
カードを装填し、すべての召喚獣をバッタレッグの能力で高くジャンプさせ、大量の飛び蹴りを浴びせる『ガタキリバキック』を発動する。
「うわあ！」
「きゃあ！」
とDクラスから悲鳴があがる。強力なキックを浴びた召喚獣が爆発して消滅したのだ。そして、キックの雨が止むとフィールドに立っているのは快の召喚獣であるディケイドオーズGKだけであった。
点数が表示される。
『化学　Dクラス軍団　　0点
　　天野快　　76点　　』
決着がつき、布施先生がフィールドを消す。すると、
「戦死者は補習～！」
とまた突然西村先生が現れ、清水たちを連行していった。
「クッ・・・、天野快・・・！とんでもないやつですの・・・」
すれ違いざまに清水がそう言った。
「お褒めに預かり光栄だ。」
快も皮肉を言う。すると清水は不敵に笑い、
「ふふっ、まあいいですわ。我々Dクラスの勝利は確定しています。」
「何・・・？」
「今頃、Dクラス代表の平賀源二（ひらがげんじ）が他のFクラスたちをボコボコにしているでしょうね。ご存じ？　召喚獣戦争はどちらかの代表が負けるまで終わりません。反対に言えば代表が負ければ戦争は終わります。つまり、あなたがいくら強くても代表が負けてしまえば意味がありません。」

「要は、その平賀ってやつを倒せばいいんだな？」
快が聞くと、ズズン！とどこかで何かがぶつかったような大きな音が聞こえた。
「そういえば、平賀源二は誰にも負けない力を手に入れた、と言ってましたわ。もうじき勝負もつくでしょう。」
清水は余裕そうに言う。
「雄二が負ける前に倒せばいいだけのことだ。」
快は言葉を返す。
「やれるもんならやってみろですの。」
「やってやんよ。」
快はそう言うと音がしたほうに向かった。
そして快がＤクラス軍団に勝利する少し前、Ｄクラスの教室
「平賀、もうすぐＦクラスがここに来るってお前が言ってた時間だな。」
「ああ、もうすぐ、もうすぐだ・・・。これでやつらに復讐できる・・・！」
と何やら不穏な会話が行われていた。
「しかし、よくこんな作戦をとったな。自分を倒しに来るであろうＦクラスを転校生に向かわせたやつら以外をここに集めて迎撃する、こんな作戦、未来予知でもしないと使えないぞ。」
近くにいたＤクラスの生徒がそう言う。確かにそうだ。彼は、雄二たちの作戦をなぜか知っている。
「クク・・・、この力のおかげだ。この力で俺は無敵の力を手に入れた！ハハハハハハ！」
高笑いしている平賀を心配そうに見つめる英語教師の遠藤先生の姿があった。
（彼って、あんな感じだったかしら？普段はもっとおとなしい子なのに・・・。？何かしら、アレ？）
彼女の心配をよそに高笑いしている平賀の手にはＵＳＢメモリーのようなものが握られていた。

俺と囮と増殖と・・・、　（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！
なんと、今回は2か月前に感動の最終回を迎えた仮面ライダーオーズから、初コンボであるガタキリバコンボを登場させてみました！
次回はDクラス戦争最終決戦スタートです！　お楽しみに！

俺とメモリと変貌と・・・、

「音がしたのは確かこの辺りだった気がするんだがな。」
快はきょろきょろと周りを見渡す。すると一つの教室の近くでフィールドが発生しており、そこの前で腕組みして立っている西村先生を見つける。何やら教室の中の様子を見ているようだ。
「西村先生」
快が声をかけるとチラ、と快の方を見てから突然、トン、と快のことを軽く突き放した。
「おっとっと・・・」
よろけながらその場から一歩後ずさる。
「何するん・・・」
ですか、と言葉を続けようとしたがそれは果たせなかった。突然、目の前のドアが吹っ飛び、大きな音を立てながら壁に何かが激突した。見るとそれは召喚獣である。装備は木刀と改造学ランという、何とも頼りない召喚獣だった。
「！」
快はその召喚獣に見覚えがあった。その召喚獣の召喚者は快がこの世界で初めて友達になった人間、
「明久！」
そう、吉井明久である。快は慌てて教室の中に入る。するとそこには多くの召喚獣が展開し、いたる所で対決していた。見ると、雄二の召喚獣に3体の召喚獣が襲い掛かってきているところを発見した。
『代表が負ければ、戦争には負けるんですの。』
清水の言葉を思い出し、
「サモンッ！変身！」
快は雄二を守ろうと召喚獣を召喚し、変身させる。
《カメンライド　ディケイド！》
マゼンタの装甲に身を包んだ快の召喚獣がライドブッカーソードモ

ードで3体の召喚獣を切り付ける。
「快！来たのか！」
雄二が声をあげる。
「よそ見すんじゃねえ！」
さらに何か言おうとしたが、敵の邪魔が入り快と雄二は召喚獣を背中合わせにし、
「「クッ、まずこの状況を切り抜けるぞ！」」
全く同じことを言った。お互いの点数が表示される。
『英語　Ｄクラス　藤川啓祐　１３２点　　Ｆクラス
坂本雄二　９３点
中曽根大輔　１１９点　ＶＳ
香山晃　１０６点
天野快　１２１点　』
雄二の召喚獣は手負いらしく、点数が少ない。対してＤクラスは全員が3桁以上の点数だった。快は、中曽根、香山の2人を、雄二は藤川の相手をしている。
「雄二、状況は！」
快は戦いながら雄二に戦況を聞く。
「俺としたことが、やつの・・・平賀の罠にはまっちまった。Ｄクラスの連中はお前に仕向けたやつら以外の生徒をここに集めて、待ち伏せしてやがったんだ！」
メリケンサックで敵の双剣を受け止め、頭突きを食らわせながら雄二が答える。
「俺たちもお前以外の全員でここに来たから多少戦力はあったんだが、向こうが強すぎる！いまは、俺
明久、秀吉、島田、姫路しか残ってねえ！Ｄクラスの方は１３人、こいつはちょっと不利だ！」
戦況を話し終え、雄二は藤川の召喚獣の腹部にパンチを入れ、吹っ飛ばす。
「なるほど！大体分かった！」

快は新しいカードを取り出しながら答える。
《カメンライド　ブレイド！》
「ハアッ！」
ブレイドに姿を変えた快の召喚獣はライドブッカーで中曽根の召喚獣を切り付け、後ろにいた香山の召喚獣を蹴り飛ばす。２体の召喚獣がよろけている隙に新しいカードを取り出し、高くジャンプする。
《ファイナルアタックライド　ブブブレイド！》
マッハ、サンダー、キックの３つの力を集中させて放つブレイドの必殺技、『ライトニングソニック』を２体同時にぶつけ、一気に点数を０点にさせる。そして雄二もメリケンサックの連撃で藤川を押し切り、何とか勝利した。
「これで後は１０人！雄二は秀吉たちの援護に！俺は平賀をやる！」
「分かった、だが気をつけろ！何か今日の平賀は様子がおかしい！」
雄二が秀吉たちの援護に向かいながら快に忠告する。
「ああ、分かってる！」
快は短く答え、Ｄクラス代表平賀と対峙した。
「快！」
先に戦っていたのであろう明久が快に声をかける。
「明久、さっき召喚獣が壁に叩き付けられていたが大丈夫か？お前の召喚獣は・・・！」
快が言うと
「大丈夫大丈夫！あんなの慣れてるから全然痛くないよ。」
明久は気丈に答えた。
「お前が転校生とか言うやつか・・・。まあ良い、２人まとめてかかってこい！」
平賀が言うと点数が表示される。
『英語　Ｆクラス　天野快　１２１点
ＶＳ
Ｄクラス代表　平賀源二　１３７点
吉井明久　８７点

』

明久の召喚獣は先程の攻撃で点数が少なくなっている。対する平賀の召喚獣はＲＰＧに出てくる勇者のような武装で構えている。すると

「吉井・・・、お前は楽には殺さない・・・。たっぷりといたぶってやる！」

平賀は制服のポケットからＵＳＢメモリーのようなものを取り出し、スイッチのような突起部分を押した。

「まさかそれは・・・！」

快はそれがなんなのかすぐに理解した。

《プロフェシー！》

メモリーから音声が鳴る。そしてそれを自分の召喚獣に投げた。すると平賀の召喚獣にメモリーが刺さり、勇者のような姿から何か別のものへと変貌していく。体は白を基本に、中央に紫色のラインが走り手にはバスターソードから変形した白い大剣が握られていた。

それは、召喚獣の本来の姿ではない。

「・・・、ドーパント・・・！」

快が小さくつぶやくと完全に平賀の召喚獣はメモリー、ガイアメモリに飲み込まれ、仮面ライダーＷの世界の怪人『ドーパント』に姿を変えた。

俺とメモリと変貌と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは。
今度は召喚獣がドーパントになるという驚きの展開です！少々強引かもしれませんが、これはこれで気に入っています。
次回は対プロフェシードーパント戦を書いていきますので、お楽しみに！

俺とメモリと怨恨と・・・、

「快、何なのアレ！？向こうの召喚獣が変になっちゃったよ！」
目の前で平賀の召喚獣が変貌し、困惑する明久が快に聞く。
「おいおい、まさかガイアメモリを使ってくるなんて・・・！」
快がそういうと、
「ガイアメモリ？何それ？」
明久がさらに聞き返した。
「ガイアメモリっていうのは・・・」
快は説明しようとする。しかし、どうやって？という疑問が快の頭に浮かびあがった。ここで、
「仮面ライダーWの世界ではびこっている、人を怪人にする道具だ。」
なんて言っても、明久はちんぷんかんぷんだろう。なのでここは、
「あー、アレだ、ほら、えっと、召喚獣の能力を向上させる秘密のレアアイテムだ！」
とそれっぽい感じで答えておいた。
「ちょっと平賀君！召喚獣を改造したら反則ですよ！」
遠藤先生が平賀の行動を注意する。しかし、
「遠藤先生、これは反則ではありません。これは僕の召喚獣の能力ですよ。」
と言い返す平賀。さらに平賀は続ける。
「召喚獣はまだ未知の領域が多いんでしょう？だったらその未知の領域に入ったということなんですよこれは。」
とペラペラと話す。
「え、そ、そうなんですか？・・・、分かりました。そういうことならこのまま続行してください。」
あっさり論破されてしまった遠藤先生は、注意を取り下げた。
「さあ、これで準備は整った。覚悟しろ！吉井明久！」

「僕?!」
姿を変えた平賀の召喚獣、いやプロフェシーのメモリを使ったので「プロフェシードーパント」と言うべきか、が明久の召喚獣に突進する。
「まずい!」
快は明久の点数が残り少ないことを思い出し、召喚獣を動かして明久の召喚獣の前に出る。
「邪魔をするな!!」
しかし、プロフェシードーパントに裏拳を浴び、そのまま横に殴り飛ばされる。
「ウッ!」
召喚獣が顔面に裏拳を浴びたので、快の頬ににも痛みが走る。そしてドーパントは明久の召喚獣の腹部を蹴り、そのまま吹き飛ばした。
「ウグッ・・・」
明久も快同様、痛みのフィードバックにより、明久は腹に激痛を覚えた。この痛み方だともう0点ではと思い、明久が確認する、しかし
『英語　吉井明久　75点』
まだまだ点数が残っていることに驚き、明久は
「すごい!僕の召喚獣って意外と頑丈?」
と自分が耐えたと思っている。しかし快には分かっていた。
(いや、あいつ、まさか・・・)
「手加減しているんじゃないか、そう思っているんだろ?」
「!」
考えていることを平賀に読まれ、驚く快。
「言ったはずだ。たっぷりいたぶると!そう簡単に死なれては困る!」
殴り、蹴り、切り付け、少しずつ、少しずつ明久の召喚獣を攻撃している平賀のプロフェシードーパントは、明久を倒すのではなく、明久本人をフィードバックの痛みで痛めつけている。すると、

「明久君！」
向こうでの戦闘を終え、こちらに参戦してきた姫路の召喚獣が横から大剣で攻撃しようとする。だが、振り下ろされた大剣はプロフェシードーパントに片手で止められ、そのまま大剣ごと投げ飛ばされた。
『英語　姫路瑞希　２０８点』
姫路の点数が表示される。姫路と平賀の点数さはかなりあるが、それをものともせず姫路を片手であしらう強さを持っているのは、メモリの力であろう。平賀はさらに明久に攻撃しようとする。
「明久はやらせん！」
今度は秀吉が真正面から日本刀で切りかかった。ガキン！秀吉の召喚獣とプロフェシードーパントの刀と剣がぶつかる。ヒュッ！と秀吉が召喚獣に蹴りを入れさせる動作を見せる。だがそれはもう片方の腕で受け止められる。
「邪魔をするなと言っている！！」
ドゴッ！と逆に秀吉の召喚獣が強力な蹴りをくらった。
『英語　木下秀吉　５３点』
秀吉の点数がもうぎりぎりのところまで来ている。それを判断したのか、平賀は剣で秀吉に止めを刺す動作に入った。秀吉の召喚獣の顔面に剣が刺さろうとしている。
「やめろっ！！」
痛みでボロボロの明久の召喚獣が木刀でそれを受け止める。ボキッ！大きな音と共に木刀はへし折れてしまった。構わず平賀は明久と秀吉の召喚獣を串刺しにしようとしている。
《アタックライド　ブラスト！》
後ろから快が攻撃する。しかし平賀のプロフェシードーパントは何も見ず避けた。だがそれは、明久と秀吉の召喚獣を雄二の召喚獣と島田の召喚獣が避けるのには十分な隙だった。
「大丈夫？アキ、木下？」
十分距離をとり、体勢を立て直す。

「ありがとう美波、雄二。助かったよ。」
「うむ、礼を言うぞ二人とも。」
明久と秀吉が島田と雄二に礼を言っている。秀吉はそうでもないが、明久は痛みのフィードバックで、かなり疲弊している。
「しかし、何なんだあいつは、なんでこうも明久を狙っているんだ？明久、何か心当たりは？」
「さあ、僕にもさっぱり分かんないんだよ。僕何したんだろ？」
雄二と明久が話しているとすると快が突然
「なあ、雄二、お前はさっき待ち伏せをされたと言ってたよな。」
と聞いた。
「ああ、そうだが、それがどうしたんだ？」
雄二が聞くと快はニッ、と笑いこう言った。
「やつの倒し方が分かった。」

俺とメモリと怨恨と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは。
今回はドーパントとなった召喚獣との戦闘を書きました。やっぱりバトルって書くのが難しいですね。
次回はDクラスとの戦争が決着します。お楽しみに！

俺と連携と決着と・・・、

「倒し方が分かったって本当？」
明久が快に聞く。快は自信満々で、
「ああ、これはおそらく間違いない。」
こう答えた。
「具体的にはどうするんだ？」
雄二が言う。そして快は自分の考えを話した。
「作戦は・・・、」
「さ、作戦は・・・？」
「作戦は、あいつに自分たちの考えていることをばらすことだ！」
『・・・・・・・え？』
快の作戦を聞いた一同はポカーンとなる。
「えっと・・・、それはつまり・・・？」
「だから、あいつに全員が自分の考えていることを伝えるんだよ。」
「だからどういうことなのじゃ！？」
秀吉がたまらず語気を強める。
「いや、今は何も言わずに俺に従ってくれ。これで勝てるんだ。」
快が落ち着き払った声で頼む。
「どうした？作戦会議は終わったか？」
快達に勝てると思っている平賀が離れたところから聞く。
「うるせー！もうちょっとだから待て！」
快が平賀に向かって言う。
「いいか、ここでグダグダやってても始まらねえ。俺を信じてくれ！」
「・・・、分かった。だが失敗したら承知しねえぞ。」
「仕方ないのう。して、どうすればいいのじゃ？」
雄二と秀吉が言い、ほかのメンバーも快の作戦を聞き入れた。
「ありがとう、じゃあ、どうするか言うぞ。ここで重要なのは一つ

だけ、必ず全員で攻撃すること。」
「それだけか？」
「ああ、それだけだ。」
「よし、お前ら、今は全員の連携が必要だ。呼吸を合わせていけ。」
雄二が指示を出す。
「いや、呼吸を合わせる必要はない。全員自由に攻撃してくれ。」
快がそれを訂正する。
「どうしてだよ！？」
雄二が快に問う。
「やってみれば分かるから！あと、考えを伝えるってのは例えば『俺はお前の腹部を攻撃するぞ。』、っていう考えを相手に伝えるように頭で考えるんだ。」
「なるほど。分かったよ。」
「じゃあ行くぞ！この戦争には絶対勝つんだ！」
ザッ！と快達Ｆクラスのメンバーは平賀の前に出た。
「ふん、ずいぶん長くかかったな。」
平賀が待ちわびたように言う。
「悪いな。お前を倒す方法を伝えるのに時間をくった。」
快が言うと、
「フッ！やれるものならやってみろ！」
と自分の召喚獣・・・プロフェシードーパントを動かし、快達に接近してきた。
「行くぞ！全員、さっき言った通りにやるんだ！」
快が声をあげ、全召喚獣が動き始める。
「えっと、こうでしょうか？」（まず、剣で横に薙ぎ払いますよ。）
「行け！」（横っ腹にメリケンでパンチを叩き込む！）
「こういうことかの？」（日本刀で突きを打つのじゃ。）
「こうかしら？」（後ろに回って、サーベルで背中を突いてやるわ！）
「ハアッ！」（ライドブッカーで切ると見せかけて、蹴りを入れる

！）

「あ！そういえば僕だけ丸腰だ！」（あ！そういえば僕だけ丸腰だ！）

全員が思考することを、平賀に伝えるようにする。すると、

「ウッ！？」

一瞬ドーパントの動きが止まり、平賀が自分の頭を押さえる。動きが止まってしまい、全員の攻撃を、もろに食らった。

「よし！効いた！」

「これならいけるぞ！」

全員がまた先ほどと同様に考えていることを伝えるようにしながら攻撃すると、また平賀が苦しそうに頭を押さえて、召喚獣の動きが止まり攻撃を受けた。

「ウウッ、なんだこの頭痛は・・・？」

平賀が考えているうちに、快は止めに刺しに動いた。カードを取り出させ、装填させる。

《ファイナルアタックライド　ディディディディケイド！》

快の召喚獣と平賀の召喚獣の間にカードが並び、快はその間を潜り抜けさせ、強烈なキックを放った。

『ディメンションキック』を食らった平賀の召喚獣はそのまま点数が０になり、爆発して消滅した。

「そこまで！Ｄクラス代表平賀源二戦死！よって今回の召喚獣戦争の勝者はＦクラス！」

「やった！勝った！僕たちの勝ちだ！」

明久が嬉しそうに言う。

「やったわ！これであのミカン箱ともおさらばできるわ！」

「はい！これで少しは勉強が楽になりますね。」

と姫路と島田も嬉しそうだ。

「・・・さて」

快は、召喚獣が０点になったことで召喚獣から排出され粉々になったメモリを拾う。

「これはどこで手に入れたんだ?答えろ。」
快がすごみながら聞くと平賀は、
「え、えっと、その、あの、い、いきなり空から降ってきて、それから・・・」
となにやらおどおどとしていて先ほどとはまるで別人のようだった。
「なあ、快、どうしてやつに勝つ方法が分かったんだ?」
雄二が聞いた。
「ん、簡単なことだ。雄二、『プロフェシー』の意味は?」
「・・・たしか予言だったか?」
「そう、予言だ。あいつが作戦を先読みして待ち伏せしたのも、攻撃を見ずに避けれたのも、すべては予言があったからだ。」
「どういうことだ?」
「あいつは、俺たちが動く前に予言を受け、行動を先読みしていたんだ。だから俺の銃撃も振り返らないで避けれた。だから俺は考えた。もし、あの予言の力が一度に多くのことを予言したらどうなるかってな。案の定、一度に多くの予言を聞いて、動きが鈍くなってくれて助かったぜ。」
「なるほど。じゃあ、その予言の力を与えたのも、召喚獣が変わったのも・・・」
「そう、こいつの仕業。」
快はメモリの破片を見せる。
「なんなんだこれは?USBメモリーのようだが。」
「まあ、壊れちまったからにはどうしようねえな。」
2人が話していると、
「おーい、雄二、快、そろそろ行くよー。」
と明久に呼ばれた。
「まあでも、今はこの戦争に勝ったことを喜ぼうぜ。」
「ああ、そうだな。」
快と雄二は、Dクラスの教室を出ようとした。そこでピタ、と快が歩みを止める。

「そういえばさ、なんでお前は明久を恨んでたんだ?」
平賀の方を振り向き、問いかける。
「えっと、実は・・・、僕が生まれてはじめた買った、その、本を彼に取られちゃって・・・、
それで、僕、怒って彼を恨んだんだ。」
「明久がそんなひでえことするわけないだろ。」
雄二が言う。確かにそうだ。明久が他人の本を取るとは思えない。
「いや、それが買ったまでは良いんだけど、そのあと段々、恥ずかしくなっちゃって、隠してたんだ。それで取りに戻ったら、吉井君が僕の本を持っていくのを見ちゃったんだ。」
「そこで引き留めればよかっただろ。」
「いやあ、僕、そういうのちょっと苦手で・・・。」
「事情は分かった。俺が言って、明久に返すように説得する。平賀、本の題名を教えてくれ。」
快が平賀に本のタイトルを聞いた。すると、
「え!?いや、そんな、こんな学校の中でそんなこと・・・。」
となにやらモジモジと言うのを躊躇っている。
「大丈夫だから、笑ったりしねえよ。」
快は優しく言った。すると、納得したのか、教えてくれた。
「えっと、確か《Hなお姉さんがピー!してズギューン!してあ・げ・る》だったかな、ってあれ?」
快はもうそこにはいなかった。そして遠くの方で、
『明久ァァァァァァ!!』
『え!?ちょ!?なになになになに!?』
『エロ本だったんかいィィィィィィ!!』ドガシャアッ!!
『ぎゃあああああああ!!』
と怒号と悲鳴が聞こえた。
「やれやれ・・・」
雄二は肩をすくめながらDクラスの教室から出るのであった。

俺と連携と決着と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは。
戦争終結です！バトルを書いていくのはとても難しいというのが骨身にしみましたホント大変だったー！
さて次回は戦争の後に起こる不思議な事件がテーマです。
オリジナルキャラが登場します！ご期待ください！
感想お待ちしております！

俺と規制と代用と・・・、

Dクラスとの戦争が終わり、次の日の朝である。結局あの後、明久は平賀にエロ本を返した。明久は、『あれは取ったんじゃないよ！学校の裏庭の掃除をやってる時に妙に木の根っこが盛り上がってるから少し掘ってみたらあれが出てきたんだって！』と必死に弁解していたが、なにはともあれ、平賀は本が無事戻ってきたので明久のことを許した。だが快はそんなことよりもっと気になることがあった。

（ガイアメモリ・・・、あれもやっぱり亀裂から流れてきたのか？）

そう、あの時平賀が使ったガイアメモリの事である。快はマンティスワームの時と同様に世界と世界の間に生じた亀裂からこの世界に流れてきたのではないかと考えていた。

（前回は一つだけだったが、もし、何個も流れてきたら対処できるだろうか？）

そんなことを考えながら歩いていると、

「快ー、おはよー」

と明久が走ってきた。

「おう明久」

快も挨拶を返す。

「いやあ、昨日は大変だったね。」

明久が昨日の戦争の事を話している。

「ああ、全くだ。初めての戦争で一気に１５人も相手をすることになったり、代表の平賀の召喚獣が、いきなり化け物みたいになったりしてな。」

快も昨日の戦争を振り返る。

「だが、今度の相手はもっと手強いぞ。」

後ろから声がした。振り返るとそこには雄二がいた。

「雄二か、・・・その隣にいるのは？」

快が雄二に聞く。雄二の横にはきれいな長い黒髪の文月学園の制服を着た女子がいた。
「ん、ああ、こいつか。こいつは霧島翔子（きりしましょうこ）、２年Ａクラスに所属していて、俺のことを・・・ああ、いやなんでもねえ。翔子、こいつがさっき話した転校生の天野快だ。」
「よろしく・・・。」
と霧島と呼ばれた女子は、短く快に挨拶する。
「ああ、よろしく。そういえば雄二、さっき言ってた今度の相手ってどういうことだ？」
快が霧島に挨拶してから雄二に聞いた。
「もしかして雄二、ホントにやるの？」
明久が確認をとるように聞く。
「当然だ。取り下げるつもりはない。」
雄二がきっぱりと言い切る。
「やるって何をだ？」
快が聞くと雄二が答えた。
「今度また俺たちは戦争をする。相手は・・・」
「私たち・・・。」
雄二の答えに霧島が割って入った。
「え・・・、ってことは何か？Ａクラスと戦争するのか？その、学年で一番頭がいい奴らと。」
快が言うと、雄二の代わりに明久が答えた。
「雄二が前から考えてたんだけど、Ｄクラスとの戦争に勝ったらＦクラスは今度はＡクラスと戦争して一気に下剋上しちゃおうってことなんだ。」
「いくらなんでもそりゃ無茶じゃないか？」
快が言うと雄二が、
「何言ってんだ。今だからこそだ。いいか、俺たちはＤとの戦争に勝利した、この流れに乗っかって、このままＡを倒しちまおうと考えてたんだ。まあもっともＡとの戦争に負けたとしても、また設備

が元に戻るだけだからな。」
と本当に前々から考えていたであろう考えを話す。そのまま校舎に入り、下駄箱がある場所で霧島とは教室が別の方向なので別れた。
「じゃあ、そういうわけだ。翔子、後で宣戦布告に行く。首洗って待ってろ、って代表に伝えとけ。」
「分かった・・・その代りFクラスが負けたら、雄二・・・、」
「ああ、分かってる。」
と雄二と霧島は別れ際に何か話していたので、何を話していたのか聞こうとしたら、目の前に西村先生が現れた。
「天野、学園長がお前に話があるそうだ。今から学園長室に行け。」
そう快に告げた。
「おい快、お前何やったんだ?転校してきてすぐにババアに呼び出されるなんて。」
雄二が言った。しかし快にも自分が何をしたのかいまいち心当たりがなかった。
「さあ?俺にも分からん。」
快はそう言って学園長室に向かった。
「失礼します。」
快は学園長室の豪奢な扉をノックして開いた。そこには学園長が大きな椅子に座って待っていた。
「なんですか?話って。」
快が聞くと、学園長が答えた。
「お前さんを呼んだのは他でもない、ちょっとお前さんの召喚獣について聞きたいことがあってね。」
ピク、と一瞬快は眉を動かす。バレたか?と思い、少し焦る。
「俺の召喚獣が何か?」
快は気付かれないように平静を装いながら聞いた。
「お前さんの召喚獣、召喚したときは丸腰なのになぜ姿が変わるんだい?昨日はカメラ越しに見せてもらったよ。あれには驚いた。特にお前さんの召喚獣が大量に増えたときなんかはね。」

「それで？何が聞きたいんですか？」
快がさらに聞くと、学園長は手元のパソコンを操作し、ある画面を快に見せた。そこには見知った顔が沢山並べられていた。
「昨日、お前さんが倒したDクラスの生徒だよ。こいつらは全員戦争の後妙なことが起こっている。」
「妙な事？」
「召喚獣のデータがきれいさっぱりなくなってるんだよ。何の痕跡もなくきれいにね。」
「と言うと？」
「調べた結果、こいつらの召喚獣の最後の戦歴はみんなお前さんと戦った時で止まってる。」
「・・・・」
「しかも、その敗北の仕方がおかしい。普通、召喚獣は0点になれば自動的に消えるんだがこの召喚獣たちは見ると爆発して消滅している。」
確かに、キック技で止めを刺した者たちは爆発していた。
「私の見解としては、お前さんの召喚獣には召喚獣を消滅させる何らかの能力があるんだろう。だからこちらとしては、いちいち召喚獣を作り直すのは面倒だ。だからあまりこの力は使わないでおくれ。」
「ちょっと待ってください！そしたら俺はどうやって戦えばいいんですか！？」
たまらず快が学園長に詰め寄る。すると学園長は、
「その点に関しては心配ないよ。中学校で技術を担当している竹崎先生が、召喚獣に武装を装着させる方法を研究していてね。こっちで話はつけてあるから放課後に技術室に向かいな。」
「召喚獣に武装？」
快はうまく想像できなかった。召喚獣が武装するということは、さらに強化されるということなのだろうか？と考えていると、
「ほら、話は済んだよ。とっとと教室に戻んな。」

と学園長が快に部屋から出るように言った。快は学園長室から出るとそのままFクラスの教室へと歩いた。
「・・・ってなことがあったんだよ。」
快はいつものメンバーに学園長とのやり取りを話した。
「なるほどな、いかにもババアらしいな。」
「召喚獣のデータを消すなんてすごいね。」
「天野君の召喚獣が新しくなるってことですか？」
「しかし、変わったとして一体どう変わるのかの。」
「・・・開けてみてからのお楽しみ・・・。」
「やっぱり最初のより強くなるのかしら？」
皆、それぞれ思い思いの言葉を発する。
「さあ？どうなることやら・・・」
そうこうしている間に時間が過ぎ西村先生がＳＨＲにやってきた。
「えー、では朝のホームルームを始める。」
この日の放課後、学園では不思議なことが二つ起こることになるが、誰もそのことを知る由もない。

俺と規制と代用と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは。
快がディケイドの力を封じられました！（おろおろ）
次回はこの日の放課後、快が技術の竹崎先生の所へ行くところから入ります。
お楽しみに！

俺と方便と同好の士と・・・、

「うーん、やっと終わったぁ～・・・！」
快は1日の全ての授業が終わり、大きく伸びをした。今日はバイク投稿申請書を提出した以外に特に変わったことは無かった。そこで快はあることに気付く。
「おい雄二、結局なんで今日は宣戦布告に行かなかったんだ？」
そう、今朝言っていたAクラスへの宣戦布告を雄二は行っていなかった。
「ん、ああ、それがな、お前がババアに呼び出されてた時に翔子からメールが来てな、今日は向こうの代表が不在らしい。」
「なんでだ？」
「風邪じゃ。姉上は昨日風呂上りに大好物の・・・いやいや、本を読んでいてそのまま湯冷めして風邪をひいてしまったんじゃ。」
雄二の代わりに秀吉が答える。
「・・・姉上？」
快は秀吉の言葉を繰り返す。
「ああ、言ってなかったのう。わしの姉上、木下優子（きのしたゆうこ）はAクラスの代表をしておるんじゃ。」
「へえ、秀吉って姉ちゃんいたんだな。」
「まあの。幸い酷くはならなかったんじゃが大事をとって今日は休むことにしたようじゃったぞ。」
「そういうことか。ま、布告は明日にでもするさ。」
「そうか。」
「すまぬの、雄二。」
快が雄二とのやり取りを終え、立ち上がる。
「さてと、じゃあ、行きますか・・・。」
快は今朝言われた通り技術室に向かうべく、歩き出す。
スーッ、パタンと快が教室を出ると、雄二が明久と話をしていた。

「そういえば、快は召喚獣の改造に行くんだったな。」
「改造ということではないと思うけどそうだね。」
「・・・匂うな。」
「え？」
「仮にババアの言った通り、快の召喚獣が召喚獣を消す能力があったとして、それは召喚システムが決めたことで、ババアが後からどうこうできる問題じゃないと思うんだがな。」
「たしかにそうだね。あれ？じゃあなんで快は呼ばれたんだろ？」
「そこが分からないんだ。・・・、ババアが何か企んでるとしか思えないな。」
そんな会話があったとは全く気付かず、快は地図を頼りに技術室に向かい、今、その技術室の扉の前に立っている。
「失礼します。」
快は扉を開けた。中には大きな机が６つ置かれ、壁の周りには工具やら材木やらがきれいに並べられており、その机の１つに作業服を着た中肉中背の男性が座っていた。
「あの、竹崎先生？」
快は声をかける。
「・・・・・・」
しかし、先生は全く微動だにしない。何をしているのかと思い近づくと、どうやらイヤホンをしているようだった。イヤホン越しからは『二人のこの手が真っ赤に燃える！！幸せ掴めと轟き叫ぶ！！ばぁぁぁぁくねつ！！ゴッドフィンガー！！石！！破！！ラァブラブ！！天驚けぇぇぇぇぇん！！』
と言う声が聞こえ、前に置かれているパソコンではゴッドガンダムがデビルガンダムに止めを刺すあのシーンが流れていた。
「・・・、やっぱこの展開１回目はそうでもないけど落ち着いて見るとものすごい突っ込みどころ満載なんだよなぁ・・・石破ラブラブ天驚拳って・・・。」
と何やらぶつぶつと独り言を言っている。快はトントンと先生の肩

を叩いた。
「うわ！びっくりした！」
バッっと快に振り向き、イヤホンを外す。
「なにやってんですか・・・」
快は呆れながら言う。
「あ、ああ！たしか君が学園長から言われた転校生の天野君だね。」
「はい、今日はよろしくお願いします。」
快は挨拶するが内心は
（生徒待ってる間にGガンダムの最終回見るなよ・・・）
という竹崎先生への不満があった。
「ささ、立ち話もあれだから座って座って。」
と快に向かいに座るよう促す。
「あ、じゃあ失礼します。」
快は言われた通り、椅子に座った。
「えーと、何だっけ要件？」
いきなり快は椅子からズルッ！とずっこけた。何を話すのかと思ったら要件を教えてくれって一体どういう神経してるんだと思いながら椅子に座りなおす。
「さっき自分で学園長から話は聞いてるって言ってたでしょうが！！」
「え、ああ！はいはい、思い出した思い出した。召喚獣の装甲装着テストの事だね。」
先生は思い出したように言った。
「・・・え？」
「ん？」
快はポカンとなる。何言ってんだこの人は？と思い、先生に聞いた。
「あの、テストってどーゆーことでしょうか・・・？」
何やら面倒なことが起こりそうだ。
「嘘？」
明久が素っ頓狂な声をあげる。ここは学園長室。明久と雄二が学園

長に事の真意を確かめに来たのである。
「そうだよ。あれはあいつをテストに使用するための方便。本当は別に変身能力も使ってくれて構わないんだけどね。まあ、おかげで何も疑うことなく行ってくれたんだけどね。」
と何も悪びれるそぶりを見せず学園長が答える。
「つまり、快は実験に利用されるためにわざわざ技術室に向かったってことか。」
雄二が言う。
「ちょっと待ってください、がくえ・・・ババア！どうして快がそんな実験をやらされてるんですか？理由を教えてください！」
「学園長と呼べと何回言わせるんだい全く・・・。まあ理由は教えてやらないこともない。あいつには適性があったんだよ。」
「適性？どういうことだ、がくえ・・・ババア。」
「絶対あんた達わざとやってるね・・・。ゴホン、あの天野の召喚獣を詳しく調べたら、以前スタートした召喚獣の追加装甲計画で開発された装甲と適性があることが分かったんだよ。」
「追加装甲計画？」
雄二がオウム返しをする。
「この計画は、その気になれば順位が低いクラスでも簡単に校内のパワーバランスをを変えられるように1人の教員が考えた計画だよ。その追加装甲を使えば、中学1年のFクラスの一番バカな生徒が高校3年のAクラスにも勝てるかもしれなくなるっていう事らしいが1つ欠点がある。」
「欠点？」
今度は明久が返す。
「それは・・・」
「それは・・・？」
「誰も動かせないってことだね。」
ズコォッ！と明久と雄二は漫画で見るようなずっこけ方をした。
「・・・それじゃ意味がないだろ・・・！」

「まあ、適性があれば動かせるって話なんだけどね。だから最近召喚獣の検査を行ったんだよ。あれは完成した追加装甲を動かせるやつがいないかと思って実施したんだ。」
「それで快がヒットした・・・ってことだな？」
「そういうことだよ。今頃はもう始めてるんじゃないかい？」
「どうしてわざわざそんな回りくどい方法を・・・。普通に頼めばよかったじゃないですか。」
明久が聞くと、
「まあ、自分からFクラスを志願するようなやつだからねえ。何企んでるかわからないじゃないか。」
いたずらっぽく笑ってみせる学園長であった。
『お前の方が何か企んでるだろ・・・。』
2人の考えが一致する明久と雄二であった。
「・・・というわけだよ。」
ニコッと笑って説明を終えた竹崎先生の前には椅子に座り額をおさえる快の姿があった。
「ってことはアレですか？俺はドッキリ仕掛けられた挙句、テストの実験台にさせられるってことですか？」
「んー、そうだね。」
快は心の中で固く誓った。
（今度からババアって呼ぼう！！）
「さて、天野君！君に聞きたいことがある。」
「・・・なんですか？」
「ガンダムは好きかい？」
意外なことを聞かれた。何かもっと別の事を聞こうとしていると思ったのだが全くそうではなかった。
「え？まあ、はい。」
「本当かい！？」
ずいっと快に顔を近づけてきた。
「は、はい。」

「ファーストは見た!?」
「はい・・・。」
「Zは!?」
「はい。」
「ZZは!?」
「はい!」
ものすごく食いついてくるので快も楽しくなり自然と声が大きくなる。
「好きなガンダムは!?」
「ええっと・・・、ウイングゼロです!」
「どっちの!?」
「エ、エンドレスワルツの方です!」
ガシッと肩を掴まれた。
「き・・・君は、君というやつはどこまでタイミングがいいんだ!」
「はい?」
快がそう言うと竹崎先生が立ち上がり、部屋の奥に来るよう促した。
そこには扉があり扉の向こうの、その部屋は薄暗く、部屋の中では大きなパソコンが稼働していた。
「ウイングゼロの設定は知っているかい?」
竹崎先生がパソコンを操作しながら快に聞く。
「えっと、確か最初にして最強のプロトタイプMSでしたっけ?」
快がそう答える。
「正解。この召喚獣追加装甲計画のコンセプトはまず、ひとつのプロトタイプを作りそのデータを取って、そこから派生して様々な装甲を作っていこうってわけなんだ。」
カタカタと、パソコンに目を向けながら言う。
「・・・、そういえばこの計画って先生が作ったんですか?どうしてこんな計画を?」
快が聞くと、パソコンから目をそらさずこう答えた。
「んー、見たかったから・・・、でいいかな?」

「見たかった？」
「うん、召喚獣を使った戦争って言うけど、やっぱり僕としてはガンダム系の装備がもしあったら、そういう武装がいかに能力を発揮するのか見たかったんだ・・・。でも残念ながらそんな武装を持った人は出てこなかった。」
「・・・だからいないのならば作ってしまおうと？」
「そう、この計画も学園長は快く了承してくれたよ。戦争に新しい空気を取り入れようじゃないかってね。おかげでプロトタイプ完成までこぎつけたよ。さ、お話はここまで。じゃあ召喚フィールドを出すから召喚獣を呼び出して。科目は総合点だよ。」
「あ、分かりました。サモン！」
ポンッと幾何学的な紋様からおなじみの丸腰制服召喚獣が現れる。
『総合　Ｆクラス　天野快　３２７点　』
と点数が表示される。Ｄとの戦争を終えたすぐなので点数は少し低い。
「うん、見事なまでに丸腰だね。」
「うっ・・・」
さらっと気にしていたことを言われた。
「じゃあ、追加装甲装着テストを開始するよ。『アームド』の掛け声で召喚獣に装甲を着けて。」
「こうですか？アームド！」
快が掛け声を出す、すると快の召喚獣の服装が制服から何かインナーとパンツのような服装になった。そしてその周りに光の渦が発生し、足から装甲が纏われていく。白を基調にした下半身の装甲に、青を基調とした上半身の装甲が着き、美しい白い４枚の翼が背中から伸びた。手には２丁の長銃身ライフルを持ち、その姿はまるで・・・、
「ウイングゼロじゃないですか・・・これ。」
快は薄々感じていた予感が的中した。
「そう！これが召喚獣追加装甲計画第１号ウイングゼロ！！武装は

ツインバスターライフルと肩のマシンキャノン、ビームサーベルだけだけどその運動性能は他の追随を許さない！なんと飛行もできちゃう！」

「もうウイングゼロって名前も付けちゃうんですね・・・」

熱く語っている先生にツッコミを入れる。

「よし！起動は上手くいった。次は武器のテストだ。ちょっとこの的をそのバスターライフルで打ってみてくれ。」

言って快の前に召喚獣サイズの的が置かれる。

「えっと、アニメみたいにやると、こうかな・・・」

快は召喚獣にバスターライフルを2丁から1丁に接続させる。そして、引き金を引いた。

「・・・っ！！」

ドゴォォッ！とものすごい勢いのエネルギーの奔流が飛び出し、快の腕には重たい衝撃が走る。

「・・・すごい・・・予想以上だ・・・！」

竹崎先生も息を飲む。的は跡形もなく消滅した。

『総合　Ｆクラス　天野快　２９７点　』

点数が減っている。

「あれ、先生点数が減ってるんですけど」

「ああ、言ってなかったね。この追加装甲の原動力は点数だよ、武器を使うと点数が減少する。ウイングゼロの場合は空を飛ぶのも点数がいるよ。そうしないとフェアじゃないからね。」

先生が説明する。

「そうですか・・・」

「じゃあ、次はビームサーベルの出力調整を・・・」

と快は様々なテストをこなし、日もだいぶ傾いたころにテストはすべて終わった。

「いやあ、本当にありがとう！おかげで今日は良いデータが取れたよ。」

夕日をバックに竹崎先生が快にお礼を言う。

「いえいえ、どういたしまして」
快も正直楽しかったので笑顔で言葉を返す。
「ああ、日もだいぶ落ちちゃったね。今日はもう帰りなさい。」
「え、でもウイングゼロはどうするんですか？」
「それは君にあげよう。何せそれは君にしか動かせないんだ。」
「良いんですか！？」
「ああ、いいとも。ただし！」
と先生は付け足した。
「今度の戦争ではそれを使ってくれ。相手はＡクラスなんだろう？」
ニコっと笑いながら先生は言った。
「え、なんで今度はＡクラスと戦うって知ってるんですか？」
快にはそれが分からなかった。
「そりゃ、職員室では噂になってるよ。ＡクラスがＦクラスに宣戦布告するって。」
快は驚きを隠せなかった。

俺と方便と同好の士と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは。
長文すいませんでした！なんだかどこで区切ったらいいのか分からず、結局。全部入れちゃいました！ホントにすいません！
さて、装甲として登場したウイングガンダムゼロ（ＥＷ版）ですがこいつは今度の戦争で大変重要になってきます。次回は快の帰宅途中に起こったもう一つの不思議な出来事を書いていきます。お楽しみに！今度は長文になりませんように！

俺と出会いと陰謀と・・・、

快は技術室を出て、下駄箱に歩いていた。時刻は午後5時15分である。日も沈みかけ西日が眩しい。

「・・・あ・・・」

快は下駄箱から自分の靴を取り出した瞬間気付く。

「教科書、教室に忘れた。」

快が忘れた教科書は今日出された宿題を解くのに必要なものである。このまま帰ったりなんかして宿題をやらなかったら雄二曰く『宿題が3倍になる』らしい。

「しょうがないか・・・」

快はつぶやき、教室に向かった。

「しかし、Aクラスがこっちに宣戦布告しようとしてるなんて全然想像できなかったぜ。」

独り言を言いながら誰もいない廊下を歩く。

「着いた着いた。」

ガラッっと障子を開ける。するとそこには女子がいた。窓を開け、沈んでいく夕日を眺めている。だが快はその女子はFクラスではないと分かった。Fクラスには女子は姫路、島田の2人しかいないはずだからである。（秀吉はカウントしない。怒られるから。）

「おい・・・」

恐る恐る声をかけると、彼女はこうつぶやいた。

「私は私が誰だかわからないのに、世界は回ってる。」

「え・・・？」

「突然目の前に世界が広がって、今ここに立ってる。」

ヒュウと風が窓から入ってきて、彼女の秀吉より長いが霧島より短いきれいな髪をなびかせる。

「・・・・・。」

快は思わず息を飲んだ。

（きれいだ・・・）
そんなありきたりな感想しかなかったが、それ以外に表す言葉を見つけられなかった。
（いかんいかん、何を考えているんだ俺！）
振り切るように自分のミカン箱の中から教科書を取り出す。
「ねえ、あなたは自分が誰だかわかる？」
唐突に声をかけられ、え、と振り返ろうとした。すると背中に優しく抱きついてきた。
「あなたは・・・わかる？」
抱きついてきた彼女の体が小刻みに震えている。泣いている。すぐにそう分かった。
「・・・わからない。突然この世界に落っこちてきて、自分の記憶もないのに、お前は世界を破壊する者だと言われ、今ここにいるんだ。」
見ず知らずの、初対面の人に、ここまで喋ってしまった。なんだか自分に似ていると思ったのだ。
「私には、帰る場所も、帰りを待ってくれる人もいないの・・・」
「お前、名前は？」
気が付けば快は彼女に名前を聞いてしまっていた。
「・・・ユキ・・・苗字は・・・知らない・・・」
彼女、ユキはそう答えた。
「ユキか。俺は天野、天野快だ。」
「快・・・、覚えた。」
快が振り向くと、ニコと優しく微笑む女の子がいた。
（やばい、どうしようもなく・・・可愛い）
快は一瞬心臓が止まるような感覚を覚えた。スッとユキが快から一歩離れた。
「私、行かなきゃ。私には何かやらなきゃいけないことがあった気がする。」
「え・・・」

快が何か言いかけたが、ユキはそのまま障子に手をかけた。
「じゃあね、快。また会えそうな気がする。」
ユキが出ていき、自分だけになった教室で快はしばらく動くことができなかった。空には今にも沈みそうな夕日が赤く輝いていた。

「・・・博士、ＤＢ－Ｙがターゲットに接触を果たした模様です。」
とある場所、とある時間に大きな画面に映る科学者のような風貌の男が、博士と呼ばれた白髪の老人に報告をしていた。
「そうか、途中トラブルが発生したが、転送は成功したようだな。」
博士と呼ばれた老人はニヤリと口元を歪ませる。
「はい、じきにあの力が発揮されるでしょう。」
「ククク、あの力をもってすればやつもただでは済みまい・・・」
「いよいよですね博士。」
博士の後ろには、マントとローブで体全体を覆っている長身の若い男が立っている。
「ああ、これで我々の宿願は果たされる。フ、フフ、ハハハハハハハ！！」
博士は辺りに響き渡る大きな声で笑った。
「・・・楽しみにしてますよ、ネオ死神博士。」
マントの男の口元が怪しく歪む。
「待っていろ、ディケイドォォォォォォ！！」
ネオ死神博士の叫びは、地底を恐怖で震わせた。

俺と出会いと陰謀と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
えー、前回が大変長文だったため、前回よりも短く仕上げました。
新キャラが続々です！ユキと名乗る少女、ネオ死神博士、謎の男など考えるのはとても大変でした！
次回は快がＦクラスと対決？をします。そう幸せをこよなく嫌う奴らとの死闘が、幕を開けるのです。
次回もお楽しみに！感想待ってます！

結局、快が家に帰ってきたのは六時過ぎになってしまった。学校から帰る途中も教室で出会ったユキと言う少女のことで頭がいっぱいになり、宿題をしているときも全く身に入らず、夕飯の支度をしている時も幾度となく指を包丁で切りそうになった。そして夕飯を食べ終わり食器を洗った後、快は風呂に入っている。

「ふう・・・」

体を洗い、湯船に浸かり、今日一日を思い返す。

「竹崎先生からもらったウイングゼロの装甲、明久たちに見せたらどんな顔するかな・・・」

「明日からバイクで登校していいんだよな・・・」

「そういえばＡクラスがＦクラスに宣戦布告するってホントなんだろうか・・・」

といろんなことを考えていたが、

「ユキ・・・」

やはり、ユキのことがどうやっても頭から離れない快である。

「どうしてあんなに喋ってしまったんだ・・・あんな初対面の女の子に・・・」

そう考えていると脳裏に自分でもびっくりする位鮮明に彼女の別れ際に見せた笑顔が映った。

「～～～っ！」

一瞬にして顔が赤くなり、ざばっ！と勢いよく立ち上がって湯船から出る。

「いかんいかん！何を考えているんだ、天野快！何をそんなに彼女を意識しているんだ！」

厳しく自分を戒め、風呂から出ようとしたその時、ツルッ、と足が滑り、

「どわあ！」

思いっきり尻餅をついてしまった。
そして翌日、快はバイク、ディケイダーに乗って学園に向かった。
申請書も出したので、堂々とバイクに乗ることができる。
「お、快じゃねえか」
信号が青に変わるのを待っていると、横から声をかけられた。
「ん？おう、雄二か」
声の主は雄二であった。快のバイクを珍しそうに観察している。
「お前バイクの免許持ってたんだな。中々良いバイクじゃないか」
「そうか？そう言ってもらえるとありがたいな・・・そういえば今日は霧島と一緒じゃないのか？」
今日は雄二の横に霧島がいない。明久の話ではほぼ毎日一緒に登校しているらしいのだが。
「ああ、なんか今朝は秀吉の姉貴に用があるらしくてな」
雄二がそう答える。快はあの事を思い出し、雄二に知らせる。
「そうだ雄二、大変だ！Ａクラスが近々俺たちに宣戦布告するらしい！」
快がそう言うと、信号が青に変わった。そのタイミングは雄二が飲んでいた缶コーヒーを吹き出すのと同じタイミングだった。
「詳しいことは学校に着いたら話す！また後でな！」
「ゲホッ！ゴホッ！エッホ！」
雄二がせき込みながら何か答えていたが、快はもう走り始めていた。
「・・・と言うわけだ」
と快が教室で雄二に竹崎先生から聞いたことを話す。ちなみにディケイダーは快の筆箱の中に入っているらしい。
「なるほどな、さすがはＡクラス、言われなくても自分たちから申し出ようってことか」
雄二は落ち着いてその話を聞いた。
「こっちからなら俺たちの好きなタイミングで宣戦布告できるが、こっちがまだ準備が整っていない間に、潰してしまおうっていうことらしい」

快はそう付け加える。
「・・・どうする雄二、今にもＡクラスがやってきそうだが」
「いや、それはない。授業が開始されてからじゃないと宣戦布告はできない」
「そうか、ならまだ大丈夫だな・・・ってそういう問題じゃないだろ！」
「まあ、ガセネタかも知らねえし、こっちとしてはどうしようもないけどな。それに俺たちにはお前っていう秘密兵器がある」
「秘密兵器って・・・」
快は満更でもない顔をする。
「それに、いつかは通る道だ。それが早いか遅いかだけの違いだ」
雄二はもうＡクラスとの戦争のことを本格的に考えているようだった。

そして朝のＨＲが始まった。
「えー、では朝のＨＲを始める・・・と言いたいところだが、また転校生がこのＦクラスにやってくることになった。」
「・・・・・・」
一瞬の沈黙、そして
『えおおおおおお！！』
一部の『え』と大勢の『うおおおおお！！』が一緒になり一気にＦクラスの教室はヒートアップする。
「先生！その転校生は女子ですか！？」
福村が鉄人に質問する。
「ん？なんかデジャヴ・・・」
快はこの風景をどこかで見たことがあった。自分がここに転校してきたときである。今思うと随分、昔のことに思えてくる。
「・・・女子だ」
鉄人が答えると、
『うおおおおおお！！』
とさらにボルテージが上昇していくＦクラス男子。

「じゃあ、入ってこい」
鉄人が教室に入るよう促している。どんな奴だろうか、と快も少なからず気になっていた。
スーッ、と障子が開く。
「ッ！？」
ガタッ！と快はその転校生を見た瞬間、驚きのあまり筆箱を落としてしまった。
「今日からここで皆さんと一緒に勉強させていただきます。天野ユキといいます」
ペコリ、と行儀よく礼をしているのは快が昨日出会った、謎の少女であった。
『・・・・・』
先程まであんなに騒いでいたFクラス男子が全員黙りこくってしまった。
「か、かわいい・・・」
「タイプだ・・・」
とぽつぽつと、小さな声があがる。
「そうだな、天野の席は・・・」
と鉄人が開いたスペースを探していると、ス、とユキが快の横を指差した。ババッ！と、そこに視線が集まる。
「先生、私、あそこがいいです」
「ん、まあ良いだろう。天野、お前少し右に寄れ」
快は言われるがまま、ミカン箱を右にずらし、自身も右の方に寄った。
「では、特に連絡事項もないのでこれで終わる。今日は一時限目は自習だ。全員今日も勉学に励むように」
そう言って鉄人は教室を後にした。
「・・・・・」
快は何を話したらいいのか分からず、隣に座ったユキに全く話しかけられない。

「あ、あのさ・・・」
意を決して話しかけようと、ユキの方を向いた。すると、
「また、会えたね」
そう言って、ユキは快の頬に顔を近づけた。チュッ、と快は頬に何かやわらかいものが触れる感触がした。それがキスだと気付くには数秒かかった。
『ゆるさぁぁぁぁん!!』
ドスドスドスッ!!と突如カッターやら三角定規やらが飛来してきた。
「うわっ!?」
快はユキを守るように抱きかかえ、その飛来物たちを避けた。
「なにしやがる!?」
快が声を荒げるとFクラスの男子全員（秀吉以外）が謎の覆面を被り、ローブを羽織っていた。
「これより我々FFF団が邪教徒、天野快に天誅をくだす。FFFの名のもとに!!」
リーダー格らしき誰か（声からして須川か）がそう叫ぶと他の連中も
『FFFの名のもとに!!』
と後ろに続いた。
「かかれぇぇぇ!!」
須川らしき誰かがそう言うと、鎌や釘バットなどどこに隠し持っていたのか分からない凶器を手に、一斉に襲い掛かってきた。
「クソッ!逃げるぞ!」
「えっ?あっ!」
快は困惑しているユキを抱きかかえ、教室から脱兎のごとく抜け出した。
「団長!ターゲットが転校生をお姫様抱っこしながら走っています!!」
「逃がすな!!奴を必ず血祭りにあげるんだ!!」
『おおっ!!』

とさらに追いかけてくる殺気が強くなる。
「ああ、もうっ、何でこうなるんだぁぁぁぁぁぁ！！」
快の叫びが朝の学校に木霊し、快の逃走劇がスタートする。

俺と彼女と逃避行と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回からキャラのセリフに読点を入れることをやめました。なかなかまだ初心者っぷりが抜けませんが応援のほどよろしくお願いします。
さて、次回は快の逃走の続きを書いていきます。お楽しみに！
感想お待ちしております！

俺と彼女と一喝と・・・、

「どこ行きやがった！」」
「探せー！近くにいるはずだ！」
「「・・・・・」」
ＦＦＦ団のメンバー、と言うよりＦクラスの男子に追われている快は、使われていない教室の隅に行き近くを通りかかった奴等をやり過ごしている。そして近くからいなくなったことを確認して隣にいるもう一人の転校生、ユキに話しかける。
「全く・・・お前が俺にその、なんだ、キ、キスなんかするから朝から大変なことになっちまった」
快がそう言って、ユキに話しかけると、
「ふふ、ビックリした？」
と悪戯っぽく笑って見せた。
「そりゃ驚くわ。大体、なんでお前苗字が俺と同じなんだよ？」
快は率直な疑問をぶつけた。
「だって、昨日はあの後ホテルに泊まったんだもの。苗字がなかったらチェックインの時怪しまれるでしょ？」
と言うのがユキの答えだった。正直あまり答えになってないのでそれについて言おうと思ったが、快はもう一つ気になることがあった。
「そう言えば、昨日、やらなきゃならないことがあるとかなんとか言ってたけど何かできたのか？」
快がそう聞くと、ユキはバツが悪そうに答えた。
「うーん、それが結局分かったのはここに転校することになってることだけだったの。自分のことも名前以外は全然覚えていないの」
そっくりな状況にあるユキに快は親近感を抱いた。思わぬところで自分の仲間を見つけたのだ。快は意を決して聞いてみた。
「なあ、可笑しくても笑わないでくれ。お前は別の世界からやってきたんじゃないのか？」

快がそうユキに問うと、長い沈黙が訪れ、そして、
「ぷっ、あはははははははは！」
とユキが盛大に笑った。
「お、おい！笑うなよ。言ったじゃないか可笑しくても笑うなって」
快が慌ててそう言うとユキは涙を拭い、
「ふふっ、そうね、別の世界ね、なかなか面白い考えだわ」
と微笑みながら答えた。
「・・・っ！」
快はまたユキに見惚れてしまった。ユキは快の一挙手一投足が快をドキドキさせる。不意にユキが手を握ってきた。真っ白できれいな指が快の指に絡まる。
「不思議、快といるとなんだかとっても安心できる・・・」
「えっ・・・」
平静を装っているが快の頭の中はパニック寸前である。
（やばいやばいやばいやばいやばい！！どうすんの！？どうすればいいんだ！？）
心臓がバクバクと音を立て、外に聞こえるんじゃないかと思えるくらいの鼓動が快には聞こえてくる。
快とユキの顔がゆっくりと近づき、もう少しでキスができるほどの距離まで近づくと、
「団長！！さっきこの近くで笑い声とターゲットの声が聞こえました！！」
「全員武器をとれ！奴に神の裁きを下すのだ！！」
先程のユキの笑い声を聞き、ＦＦＦ団が戻ってきた。聞こえる足音の数から相当な数である。
「クソッ！感づかれたか。ユキ！ここを出るぞ！」
「えっ？」
快はユキの手を引き、教室を出た。廊下に出ると、後ろにはおびただしい数のＦＦＦ団の姿があった。
「いたぞ！あそこだ追えー！」

「血祭りじゃあーーーーー！！」
「覚悟しろ幸せ者ォ！」
怒号が飛び、ドドドド！と武器を手に迫ってくるＦＦＦ団から逃げるため、快はユキの手を引いて走る。すると
「逃がさん！」
ヒュッ、と何かカッターらしきものが飛んできた。
「きゃっ！」
小さな悲鳴が上がる。しかしそれは快のものではなかった。快に当たりはしなかったが、飛来したそれはユキの足に掠ったのだ。ユキの足からは少量だが血が出ていた。
「・・・！」
どくん、どくん、と内側から抑えられない感情がこみあげてくるのを快は理解した。
「ユキ、ちょっと待ってろ・・・」
静かにそう告げると快は、ゆらりと自分からＦＦＦ団の前に立ちはだかった。
「・・・れだ・・・」
「ん？」
快が小さくつぶやき、ＦＦＦの１人が聞き返す。
「誰だ・・・」
「え？」
「カッター投げたのは誰だって聞いてんだよ！！」
そう叫び、ビリビリと空気が振動する。ものすごい殺気と怒気を孕みながら、快が一歩前に出る。ジリと一歩後ずさるＦＦＦ団は快が相当怒っていることに気付いた。さらにもう一歩快が前に出ると、
『す、すいませんでしたぁぁぁぁぁぁ！！』
ものすごい数の土下座したＦＦＦ団がそこにはいた。

「はい、これでもう大丈夫ですよ」
ユキの足に絆創膏を貼り、保健室の木島先生が救急箱を片付けなが

ら告げる。
「「ありがとうございました」」
快とユキの2人はお礼を言ってから保健室を出た。
「「・・・・・」」
2人の間に会話はない。保健室から大分離れるとやっと快は口を開いた。
「足、大丈夫か？」
「うん」
「そうか」
これだけの会話をするだけで快は頭の中でプチパニックを起こしているのだった。
「ねえ」
「はい！？」
唐突にユキに話しかけられ思わず声が裏返る。
「ふふっ、そんなに固まらないでよ。えっと、その・・・ありがとう・・・」
最後の方はモゴモゴと何を言ってるのか分からなかった。
「え？」
もう一度聞き直そうとしてもう一度話しかけると、
「な、何でもない！うん、何でもないよ！」
ユキはパタパタと手を振ってそう言った。
「？」
快が首を捻っていると
「ほ、ほら！もう1時限目終わっちゃうよ！早く行かなきゃ！」
タタタ、と小走りで走っていった。
「？、おかしな奴だな」
快も追いかけるように小走りで教室に戻るのだった。

俺と彼女と一喝と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回は快がユキとの関係を進展させる回にしてみました。ＦＦＦを一喝で黙らせる快の気迫と叫びはものすごいですね。（他人事かよ！）
さて次回はＡクラスに宣戦布告される回にしたいと思います。それでは次回をお楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4244x/

バカとテストと召喚獣と・・・、

2011年11月6日02時07分発行